

『縦の木のエルゼ』

瘦せ地帯エレントヴァルローテ村の神の言葉

に仕える哀れなる聖僕フリーデマン・ロイテンバッハーの幸福

(原題 『ELSE VON DER TANNE oder Das Glück Domini Friedemann

Leutenbachers, armen Dieners am Wort Gottes zu Wallrode im Elend』)

ヴィルヘルム・ラーベ作／永末和子訳

(平成21年10月29日敬揮)

"ELSE VON DER TANNE oder Das Glück Domini Friedemann

Leutenbachers, armen Dieners am Wort Gottes zu Wallrode im Elend"

von Wilhelm Raabe, von Kazuko Nagasue übersetzt

Übersetzung von : Kazuko NAGASUE

Department of Foreign Languages, Kawasaki Medical School,

577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan

(Received on October 29, 2009)

雪はしきりに降っていた。その日はほとんど一日中、小止みなく降りつづいた。夕暮れも始まろうとするころ、荒天は一層激しさを募らせた。村の粗末な小屋の周りで吹き荒れる吹雪は決して終ることのないものように思えた。村の道も森へ向かう小道も吹雪に掻き消えていた。人跡絶えたハルツの森の、その森の縁からさほど遠くないところ

ろに貧しい小屋が身を寄せ合い一塊となって、縮こまって立っていた。風は森の木々をどよめかせ、荒々しく吹き荒れていた。枝はペリペリとへし折れ、太い幹はうなり声をあげていた。突風が短く息をつくくと、狼が吼え声をあげた。一六四八年十二月二四日と日付が書きつけられた。

聖なる僕フリーデマン・ロイテンバッハー修士、瘦せ地帯のヴァルローテ村の牧師は、今日一日、クリスマスの説教準備にひたすら没頭していた。食べ物と飲み物。いや確かに純粹にいかなる一瞬であれ、目を上げてみることをさえ、彼は忘れていた。実際、この地上での生は、ただ忘れることによつてのみ、ようやく耐えることができるほどに、厳しかった。しかし、瘦せ地帯の牧師はそれを(訳書註 文法上は "die Göttergötter" とするが、同書上巻の脚注を参照せよ)忘れることはできなかった。そもそも彼は、このヴァルローテ村の牧師はもはやクリスマスの説教を書く必要など本当はなかった。彼はまださほどの年齢ではなかった。彼は一六二〇年の生まれだ。しかし、彼の在存の三十年は三倍にも、四倍にも数えて構わない人生だった。ローマ帝国が遊牧の民の前に滅び去って以来、現在ほど凄惨な荒廃した時代を世界は経験したことはなかった。いま、第二帝国が、ドイツ民族が経営したローマ帝国が崩壊したのだ。もっともまさにこの廃物同然の帝国が百五十年間という長きに亘って、毅然として存立し続けていたということ自体が驚異であったかもしれない。嵐や大風にあつたに、荒廃し苔むした部分のあちこちで揺がゆるみ、軋んでいた。それが、いま、音を立てて崩おれたというだけのことであった。ミュンスターとオスナブリュックの講和会議で、そういうことになったのだ。結果、国民の三分の二が三十年戦争の篩にかかれ、失われてしまったというわけだ。

誉れ高きフリーデマン・ロイテンバツハー瘦せ地帯エレントにあるヴァルロ
ーデ村の牧師もこのことについては話すことが少々あった。彼の手首
には血のように赤い、縄と皮紐が刻み付けた痕跡が筋となつて残つて
いた。それは八百人の村民を一人残らず焼き討ちにしたと自慢するプ
ール將軍の略奪一味の残した仕業だつた。彼らは駄馬に彼を結わえて
森へと引き摺ひつていった。ガラス大将3)の率いる野蛮な輩は彼にスエー
デン流飲み物という拷問4)を試し、リナルド・トルステンゾン指揮官5)の
潰走する部隊といえは、彼一人いひとの哀れな身体に対してばかりか教区
民たちの身にまで、とうてい言葉に言い尽くせぬ暴行狼藉を働いた。

雪は激しくなつた。そして、終わりを迎えるなどまるでないかのよ
うにみえた。しかし、夕暮れのほうはほほ一時間早く、書きものを続
ける修士の手からペンを取り上げた。彼は眼を上げてあたりを見回し、
窓ガラスの向こうに視線を投げた。そのとき、彼は、夕闇が彼の脳髓
の奥深く、幽かに、氣づかれもせず這い込んだかのように感じたのだ
つた。

そこ、彼の目の前には粗悪な紙のぼろ切れがあつた。この紙を、孤
独な日々の明け暮れのなかで、彼は節約に細心の注意を払いながら使
わねばならなかつたのだ。そこには、野蛮で、見境もないただただ粗
暴な一団たちの侮り笑つものの手を、破壊に酔い痴れるものの手を、
辛くも免れた僅かな書物だけがあつた。とりわけ古い、いまや擦れて
ぼろぼろになつた聖書があつた。一六三九年の小屋が三回目の焼き討
ちに遭つたとき、ようやく救出したもののなのだ。表紙や黄変した頁の
縁には炎の舐めた跡が残つていた。これらすべてが彼のいうところの
精神の戦闘具であり、牧師の身体を常時取り巻く、そのほかのすべて
と完全に同じ一つの響きを奏でていた。この時代、もっとも貧しい家

でさえ、この牧師館よりはもっとましな品や食料をお見せすることが
できたに相違ない。なにしろ忌まわしい戦争の間、真つ赤な鶏冠を振
りたてる鳥が小屋の屋根の上に、三度、留まって焼き尽くしていつた
のだから。この牧師館では、あの竈の隅つこに丸まって眠る大きな白
い猫だけが、この屋根の下にあつても居心地よく感じる唯一の生き物
だつた。

しかし、牧師は彼を取り巻く惨めさのどれひとつにも眼を向けはし
なかつた。彼はこの瘦せ地帯で育つた。彼の教区がのつかつていよう
な地味の瘦せた貧しい森林地帯は、「瘦せ地帯」イム・エレント（訳註：エレントは誤綴、といふ）と呼ば
れる。ヴィッテンベルクで過ごした学生時代だけが、彼の人生におけ
る唯一自由というものを呼吸し得た時だつた。しかし、明るく輝く太
陽のときは迅速に過ぎ行き、彼にはまるで遠い、遥かな定かでない夢
に思われたに相違なかつた。もし樅の木のエルゼが出現しなければ、
フリーデマン・ロイテンバツハーはドイツ国民のみなと同じよう
に、この瘦せ地帯で、徒に生き続けたことであろう。

彼は聖夜の説教原稿の傍らにペンをおき、低い窓に歩み寄り、夕暮
れの薄明かりのなかで手首に残る赤い線条痕をみつめた。彼は重苦し
い気持ちに心ふさがれ、じつと立ち尽くし、彼と同じように手を戒め
られ、激しく打擲され、血を流し、引きずられ、殴り倒されていつた
ドイツ国民を思い浮かべた。主は高き所より怒りの声を発し、彼の聖
なる宮より彼の雷声を彼の国のすべての住人の耳に轟かせた。彼は葡
萄踏みのように歌い、叫び、聞かせた。彼の大音響はこの世の極はてまで
鳴り渡り、この世の極はてまで死体は横たわつた。倒れし者を哀しむ者な
く、集める者もいわんや葬る者もない。誉れ高き僕フリーデマン・ロ
イテンバツハーは、しかし、それよりも何よりもはるかに多く樅の木

のエルゼのことを思った。彼女はあの深い森をいま出立しなければならぬのだ。そして、彼は、一六四八年のこのクリスマスの前夜、預言者の御言葉を引いて語った……

「わが肉と肌膚をおとろへしめわが骨を砕き、われにむかひて患苦と艱難を築きこれをもて我を圍み われをして長久に死し者のごとく暗き處に住しめ 我をかこみて出ること能はざらしめわが鎧索を重くしたまへり。」

それから彼は深く重いため息をついた。吹雪の闇を透かして、教区の村の灯火が二つ、三つちらちらと光っていた。だが、彼はこの弱々しき火影の周りにどんな動物的な愚かしさが、そしてどんな陵辱と人間の苦悩が息を潜めてうずくまっているかを知っていた。それゆえに彼の魂は彼らから顔をそむけ、不安に満ちて捜し求め、いよいよ遠く迷い込んでいった。いっぼう夜はますます凄みを帯びていた。嵐はいよいよ激しく荒れ募った。

白い猫は立ち上がり、小部屋をそつと過ぎつて近づき、優しく鳴いて、彼女の主人の脚に身を摺り寄せた。マルティーナが居間を覗きランプをつけたものかどうかと尋ねた。しかし、牧師は頭を振って、いやと短く答えた。マルティーナはそつとドアをもう一度閉めた。そして、聖なる僕フリーデマン・ロイテンバッハーはまなざしを相変わず戸外の暗闇に置いたまま、なおも樅の木のエルゼのことを思った。彼の心は以前よりも増していよいよ強く彼女に捕えられていった。彼は樅の木のエルゼのことを思った。高い樅の木のそばの彼女の小屋のことを。コンラート修士が彼の六歳の子を腕に抱いて森へやってきた太陽の輝く夏の日のことを。牧師は、森の中で響く彼女の声のこゝろを思い浮かべた。彼女が茂みのかげで歌い、草の冠を編んでいた様

子を思い出した。そして彼の教区民たちはこの美しい少女を魔女とみなし、ひとりりで彼女と行き遇えば彼女を避けた。そして、深い森で彼らが集団で彼女に出会おうものなら、嘲笑し、軽蔑し、迫害した。そして彼は洗礼者聖ヨハネの日のあの事を思い出し、声をあげて呻き、両手をもみしだいた。

それは滅多とない、ひどく法外な事件であった。一六三六年九月二四日、バニエール將軍は、ヴィットシュトゥク近郊で、凄まじい激怒に燃えた戦鬪を戦い抜き、その果てにザクセン並びに皇帝軍を打ち負かし、ドイツの支配者となった。彼は八万人の敵を虐殺し、六百本の軍旗と騎兵旗をこの侵攻で勝ち取った。しかし、民衆は彼が治めた時代を恐怖し「スウエーデンの時代」と呼んだ。数世紀に亘つて、この言葉の意味するところのものは、苦悩の響きは鎮まらず、声なき民の呻吟は静かに、恐怖に脅えながら、続いた。

スウエーデンの時代に父親に伴われたエルゼが瘦せ地帯の森へやってきた。

九月の終り頃のこと、森へ薪を集めにいった子どもたちが家に戻って、高い樅の木のほとりに不思議な、漆黒の馬と屈強な武器をもった男と四匹の大きく狼のように獐猛な感じの犬に護衛された一行がいると、告げた。更に続けて、彼らはこつ報告した。高い樅の木の下で焚き火が焚かれ、そのそばにまったく愛らしく優美な少女が座っている。そして屈強な男がその子にスープをこしらえてやっている、と。

そこで数人の村人が出かけていった。よそ者を偵察するために出発した一行は、戻つて、言った。全くその通りであった、と。焚き火は燃え、四匹の犬も確かにおり、少女はその内の一匹の胴体に頭を載せて眠っている。漆黒の馬は茂みで休んでおり、見慣れぬ男が茂みを伐

り拓き、夜を凌ぐ小屋を立てている。しかし、それは韃靼人ではない。そこで若い牧師フリーデマン・ロイテンバッハーも森へ出かけてみた。そして彼に伝えられた通りのことをそっくりそこに見た。しかし、彼は遠くから恐る恐るこのよそ者一行を見た連中たちとは違って、すぐそばまで行き、濃い黒い鬚を生やした男に挨拶し、なぜこのような住み心地の悪い森の奥深くに宿営の小屋を立てるのか、なぜ村里へ下りて来て、牧師館への道を上り、痩せ地帯の村とはいえ、出せるかもしれない援助やこうしたひどい時代が取りこぼしていったものもあるうのに、なぜ、喜んで受け取るうとしないのかそのわけを尋ねてみようとした。しかし、このよそ者は、好意のこもった挨拶にさえ返事のひとつ返そうとはしなかった。彼は作業の手をとめ、目を上げてみるそぶりさえみせなかった。長いもじゃもじゃの髪が彼の顔にかかっていた。ただ黒い馬だけが、牧師のほうをみた。三匹の屈強な犬は身を起こし、伸びをして、白い歯と血のように赤い舌を剥き出しにしながら、うなり声をあげた。眠った子が頭をのせている毛むくじらの四番目の犬だけが相変わらず横になっていた。が、そうしながらも、同じく唸り声をあげ、白い歯を剥いていた。牧師は離れたところからものをいつたりしたりする習慣など、もともと知るところではなかった。彼はためらいながらも、よそ者の巧みな手が灌木や枝を組んで小屋を建てあげるのを見つめていた。二輪馬車を、そして、高い縦の木の傍の小さく燃える火をみた。しかし、とりわけ彼は眠る女の子をみた。突然、一本の樵の巨木の幹を回り込んで夕陽の一条の光が真っ赤な輝きを放って差し込み、彼女を照らした。この強い輝きと眩しさにその子は眼を開いた。この子も伸びをし、身を起こした。途端に枕を貸していた狼のような犬は跳ね起き、牧師に向かって吠え、飛び掛かった。

そのとき、その子は愛らしく驚き叫んだ。「マールシャルク、マールシャルク。戻っていらっしやい。よしなさい。」

すると、マールシャルクは牧師の胸から前足を離し、三匹の意地悪な仲間たちのもとへ戻った。少女は地面から立ち上がり、にこにこしながらフリーデマン・ロイテンバッハーに近寄っていった。

「こんばんは。すっかり驚かしてしまいましたでしょ、おばかさんのマールシャルクが。でもどつぞ、怒らないで下さい、お願いします。」彼女はもつとお話したいと思った。そして痩せ地帯エレントのヴァルローデ村の牧師も彼女に答えてあげたかった。しかしそのとき鬚の濃い男が斧を手に近づいてきた。そして子ども腕を掴んで、威嚇するように牧師の前に立ちぶさがった。斧の柄で彼を押し戻し、森のほうを指した。あたかもこういつているかのようだった。お前さんの行く道はあつちだよ。僕はお前さんなんぞとかかわりたくないんだ。僕はお前さんの笑い顔や親切なことばなどほしくないのねえ。いいですか、もと来たところへ戻りなさい。そして我々の邪魔を決してするんじゃないと告げるがよい、と。

男の目はフリーデマンの胸に前足をかけ、歯を剥き出しにした犬より、数段恐るしくぎらぎらと光っていた。牧師はなおも短く善意の言葉を差し挟もうとしたが、そのとき、よそ者はぎらぎら光る斧を振り上げ、脅しつけた。彼は驚き、一撃を免れるため、後ずさった。

幼い少女は悲鳴をあげ、小さな手で眼を蓋った。いっぽう自分の善意が黙殺されたことを知って、彼は深い思いに沈みながら、森の木立を抜けて自分の来た道をたどった。村に戻って、彼は、教区民に彼をそっとしておき、見守ってあげるのがよいだろうと告げた。主が人間

の心や考え、行いや営みに腹を立て、打撃場に突き出して、篩いにかけてより分けるのは、神のご時世のことだ。男であれ、女であれ、めいめいは喜んで自分の仲間の痛ましい部分に向き合い、和睦を結び、かわいそうな兄弟に彼の道を開いてやること、そういうことで互いのかかわりに決着をつけていかなければならない時代なのだ。

教区民は頭を振った。が、しかし、恐らく彼らも彼らの魂の助言者のことは従うに違いなかった。それに彼らは、実際、あの四匹の屈強な犬と強そうなよそ者のもつ銃の前では少なからず恐怖を覚えていた。この男も、痩せ地帯のこの高い樅の木の下なんぞで、決して住めやしないと知って、来たときと同じように、彼の持ち物すべてを携えて、下りてくるであろうと勝手に思い込んだ。

しかし、別の日、詮索好きな魂は再び高い樅の木のもとへこっそりと忍び寄せた。そこで、彼らは例の場所にまだその一行がいるのを見た。彼らは遠くであの大きな犬たちが吠えだてる声を耳にし、猟銃の炸裂音を聞いた。あの不気味な男が仕留めたオスのノロシカを肩に茂みから出てくるのを目撃した。しかし、その子は一緒にいなかった。その後、ほぼ二週間、長雨が続き、森の奥深くへ立ち入る者はいなかった。しかしながら、三週間目にこのよそ者は猟銃を肩に、犬一匹を従えて村へ下りてきた。そして焼け落ちて、ひとかたまりの黒焦げの角材の山となった役場の前に腰をおろした。人々が小屋を出て、彼を取り囲み、大きな輪を作るまでにさして時間はかからなかった。ひとりの少年が牧師のもとへ走り、出来た事のあらましを、あの高い樅の木が黙りこくったまま、聾者のように市庁舎のまえに居座っている様子を告げた。彼は驚いて、仕事を中断し、飛び上がりさまに通る様子を見て、使者といっしょに広場へかけつけた。そこに、彼は息

を弾ませながらも、報告どおりのこともを自分の目でみた。

よそ者は彼を認めるや、素早く立ち上がり、牧師に向かつて歩き始めた。フェルト帽に軽く手を当てて会釈し、そうして全く非の打ち所のない礼儀正しさでお時間をいただきたいのだがと、ラテン語で話した。

「失礼ですが、私たちがあなたに初めてお目にかかった日のことを遺憾に思っています旨、申し上げたく存じます。時代と私の運命が私の口より語ったのです。どうぞ、お赦し下さい。私は詐欺師でも謀反人でもなく、また浮浪者でも魔術師でもないのです。いわんや人の秘密を探って歩くものでもありません。私はあなたの民のひとりの息子であり、この世の悲惨を祖国とするものであります。私は遠い地からやってまいりました。そしてあなたがたのもとに住みたいと願っております。森の中に私の子どものために小屋を建てたいと思っております。そうするためにお手助けいただきたいのです。私もまたあなたの村の方々に対してはもちろん相応の御礼は致します。」

こうした挨拶にすっかり驚いた若い牧師は両手を高く挙げた。なぜってこのような言語を耳にするとはいなく予期していなかったのだ。このことばが、このよそ者を彼がこの日まで共に過ごす仕儀となった貧しい人々から遥かに抜き出たものにせずにはおかなかったが、フリーデマン氏は、しかし、そもそも返答をすることをほとんど忘れてしまっていた。かのよそ者がいらいらとして、まっすぐ彼を見詰め返したとき、ようやく我に返った。そして彼もまたラテン語でよそ者に話した。このような方の到着と目的は、彼にとって非常に喜びとせざるをえないことだがと、答えた。しかしながら、最後に言ったことは腑に落ちない。冬がもうすぐやって来ようとしている。この山中の冬は厳

しく険悪で、しかも長い。いたいけな子を荒地が待ち受けるあらゆる危険や難儀にさらすことはなんといつても善行と慈悲の面からもいただけない話だ。牧師の村は貧しく、そのうえ長い間続いた恐ろしい戦争は手ひどい苦難と甚大な痛手を負わせたが、そうであつても結局のところ、荒涼とした山中に比べれば、はるかによい庇護と避難所の役を果たすであろうと、言った。あなたがそうするといふのであれば、まだ一軒の小屋を立てるほどの空き地はございますと云つた。そして彼は　フリーデマン・ロイテンバッハーはどんなことでも、いつでも、いかようにも相談に乗るつもりであり、手助けするつもりであると云つた。

この話に対し、よそ者はただ首を振るばかりで、ただ、それには大変感謝するが、自分の決心は固いのだと答えた。人々の中に立ち混じつて住むことに、彼自身些かも魅かれないう、子どももまた森の自分の手で住むというだろう。それも不可能ではあるまいというのだ。ヴァルローデの農民たちはこの問答のあいだ呆気に取られてただ突つ立っていた。彼らの目だけは、自分たちの牧師とよそ者の間を行つたり来たりした。彼らは耳の後ろを掻き、互いに肩で小突きあつていた。そして次第次第に彼らの輪を縮めていった。そうこつして彼らの誉れ高き僕フリーデマン・ロイテンバッハーがこのよそから来た男がなにを希望し求めているかを彼らに説明し、ようやく話し合つことになつた。そこで村人の間に意見の渦が生じ、それは次第に声高な叫びとなつた。

ある者は云つた。このよそ者の紳士を助けてやらねばならない、彼は代価を支払うというし、要求はわずかである。もう一方の意見はこつである。そんな奴は当てにならない、だいたいその態度が全く気に入らない。

入らない。後者の者たちの頭はさまざまの物騒な考えや妄想に取り憑かれて、もはやだれも信用しない、隣人だつて、親戚だつて、それどころか神様でさえ、もうほとんど信用しかねるのだと考えていた。彼らは耐え忍んできた度重なる苦悩と現在の目前にある悲惨に目を奪われ、不安にとり憑かれていた。そして彼らは残念なことに正しかった。そこで誰をしもそのことで非難することなどできなかった。

彼らは云つた。このよそから来た男はどんな新しい禍をこの並外れたお供を使つてもたらすか知れたものではない、と。世の中はまるで變つてしまつたのだ。そしてひどく劣悪で、邪悪で血腥いものとなつてしまつていた。だから、めいめいは警戒しあい、たとえそうしなければならぬときでさえ、おいそれと引き受けたりしなくなつていた。彼らはなおもいろいろのことを口にし、ますます熱していった。そしてようやく牧師のなだめることばで再び静穩に戻つた。しかし、この衝突の決着は、このよそ者に姓名と身分、以前の住所を名乗らせ、^{エレン}瘦せ地帯ヴァルローデ村の善意と援助を請うにいかほど支払う能力があるかを申し述べるように追加要求した。

そこでこの男は話し始めた。自分は修士の学位をもつコンラートと名乗るものである。そう名乗れば、恐らくそれ以上知る必要もなからうし、また彼もそれ以上いう気はない。しかし、二番目の点に關しては、すなわち彼が望むものは何かと云つたことを告げるべきといふのなら、それは、すなわち小屋と自由だ。

彼はこついいながら脇に提げていた皮袋の中に手をいれ、四枚の金貨を取り出し、掌に載せてみせた。これを見て農民たちは頭を寄せ集め、新たに討議を始めた。用心深さと畏敬の念と不満の声は多数決で決着をみた。すなわち、コンラート修士には乞われている援助をして

やり、高い樅の木のそばで彼が望む限り自由に住まわせてやろうということが決定されたのである。

牧師のフリーデマン・ロイテンバッハーとよそ者との間の手打ちによつて、この契約は保証された。小屋は古い柱や板、芝草や石で作られた。新しいと呼ぶものですら、既に薄汚れ、壊れかけた代物であった。しかし、コンラートは高い樅の木のそばの小屋に彼の子と住み、その前で四匹の精悍な犬が見張りをした。黒い馬は差し掛け屋根の下にいた。

やがて十二年の長く不安に満ちた、疲弊と苦難の歳月がやってきた。世界も、痩せ地帯のヴァルローデ村もそしてヴァルローデ村の牧師、誉れ高き僕フリーデマン・ロイテンバッハーも、この期間をいかにして耐え抜き通したかは、既に、述べたとおりである。しかし、深い森のなかの密かな場所については、すなわち修士コンラートが子といっしょに住んでいるあの高い樅の木の下の小屋については、運命はまるで保護するかに手を差し控えていた。復讐の戦の女神はこの地上の片隅の人里離れた地さえ容赦せず、威嚇の手をたびたび伸ばしてきた。しかしどうであれ、高い樅の木の下の小屋は居座り続け、いまや、この勇敢な小屋の唯一の敵は歳月と悪天候だけとなった。なぜって村の人々は確かにこれに対して最高の善意も最高の悪意も十分持っていたのだが、敢えてそれを取り壊しはしなかった。

そしていま、痩せ地帯のヴァルローデ村の牧師、フリーデマン・ロイテンバッハーは、一六四八年の十二月二四日のこの日、歓喜のもたらず恍惚と苦痛に包まれて、彼の小屋から高い樅の木の下の小屋へ、それから再び彼の小屋へと戻る往來の糸が、幾度となく、繰り出されれば戻り、度重なって紡がれていった様を思い起こしていた。また、

あの流血のヴィトシュトッカーの戦鬪後の秋の日以来、自分の人生がどんなに変わったかを思い起していた。

彼は砂漠に、荒涼とした荒地に住んでいたのだ、そしてこの世に花がそもそもあることさえ思ってみもしなかった。飲んだり、食べたり、華麗さや優美さを身に着けてみたりすることのために、この世が造られているなど思ったこともなかった。いま、よその国からきた奇蹟の手がこの荒れ果てた地に緑の枝を運び、黒い悲劇の地に挿した。そうしてフリーデマン氏は驚きに打たれて立ちすくみ、見つめた。だが、その意味は解読できなかった。しかし訪れ来る日のある日がこの小枝に祝福のしずくを運んだ。そして訪れ来たある日が荒廢の地に奇蹟を完成するために、自分の為すべきことを果たした。冬の嵐さえ、このか細く柔らかな若枝には、何もできなかった。強引に森を吹きぬけ、高い樅の木や樺の木の枝をへし折る荒れ狂う暴風もこの小さな若枝に害を加えることは許されなかった。それは密やかに育っていき、森の外の世界の様子などまるで知らずにいた。

高い木々の梢を透かして、信仰を巡る大戦争も、帝国の崩壊もいっさい知らぬ穏やかな太陽が微笑みかけ、見下ろしていた。そして春がもうひとめぐりしたとき、奇蹟は完成した。一夜にして若枝は薔薇の木となった。そしてまわりに夏を待ち焦がれるたくさんの固い荅をつけた。コンラートは彼の小屋を独特のやり方で家具を調えた。こまごまとした持ち物を森へ積んできた馬車は、まさに魔法の馬車だった。それには、一瞥したくらいでは捉えきれないたくさんのものが満載されていた。家什器、色とりどりの敷物、たくさんの書籍、奇妙な形をした道具、家事用には不向きなようなフライパンやコップ。そういったいっさいのものが完成した一式となつて詰め込まれていた。ヴ

アルローデの農民たちはいまや彼らの仕事と援助を為しおえたとき、すなわち、小屋が立ち上がったとき、このよそ者は引越しをし、彼の持ち物を適切に置き整えた。それを物見高い村人の目から隠しおおすことなど無理な話であった。この件に関して彼が為せることはもちろんしたし、彼の4匹の犬達も加勢を惜しまず吼えたのである。が、しかし彼の所帯のなかで人目に触れたものはほんの僅かであったにしろ、人々の頭の中を奇妙な幻想でいっぱいにするには十分であった。さらにこれに加えて誇張が生じた。そして見てはいないが、噂によって聞き知るだけの人々は、偶然と好都合が味方して一瞥することができた人々より数が少ないわけではなかったが、この者たちは漠然とした、もの思わしい噂で尾鱈を付けた。この胡散臭さは日を追って、週を重ね、年を経ることにますますその不気味な色を濃くしていった。それは痩せ地帯のヴァルローデ村の暗い窟のまわりにますます抗し難く、強固に貼り付いていった。そこで程なくして、だれも、老いも若きも、牧師を除いて、村中のも全員が、かつてこの小屋の建設に手を貸したことを後悔した。さして程経ぬうちに再び打ち壊すとあらば、楽しもうじやないかとなった。こうして手を貸さずに済まそうなんていう輩はひとりとしていなくなった。

高い樅の木の立つ場所は排斥を受けた。このことが三十年戦争が終わりにさしかかる頃、それをそう呼びたいとすることを、今日においてもなお、この邪悪なことが民衆の口や心に重くのしかかることを知る者でさえ、だれもが互いに明確に仄めかしあった。ああ、なんと、フリーデマン・ロイテンバッツハー牧師を除く痩せ地帯のヴァルローデ村の誰一人、もつとまじな時代が彼に残したものの、もつとよかった自分自身の残り香を引きまとめて、一人の人間が世捨て人となるにあた

つては、そこには何千もの理由があるということを知ることができなかったのだ。ただ、何か忌むべきもの、なにやら空恐ろしいこと、人目を憚ることを企み、捏造したりするために、このよそ者はこんな不可思議な生活様式で、このような不気味な場所に隠れ住んでいるに違いないと、こう村人たちは想像した。

ついにコンラートと彼のかわいらしい娘は、猟犬たちが次々と死に、やがてもはや目も薄れ、強くもなくなってしまうた勇敢なマルシャルクまでもが死んでしまった後、この人目を阻む奥まった彼らの生活ぶりに纏いつき、高い樅の木の下の小屋の周囲を漂う、まさにこの幽鬼じみた灰色の帳のなかにこそ、唯一の保護を見出すこととなったのだ。たしかにこの陰鬱さは彼ら二人に、できる限りの力を尽くして、訓戒、忠告、懇願やで、彼の教区民たちの哀しむべき粗野と無知の魂を取り除こうとするロイテンバッツハー牧師より以上のよい保護を与えた。

牧師が真つ先にもかも一番激しい毒で、この「よその民」^{フョレルツ}によって魔法をかけられてしまったことが村のどの子にも分かった。彼は呪縛されてしまい、もはや万物を創造なされた主でさえお救いにはほぼおできにされないのだ。

真実、フリーデマン・ロイテンバッツハー牧師のうえにはある魔法がかかっていた。しかも強力なのが。彼は、痩せ地帯の彼の隣人たち、すなわち教区民たちが恐れと嫌悪から森の中の一行の存在に背を向ければ向けるほど、それだけ頻繁にその場所へと曳き寄せられていった。もしこのようなのが魔術師の業というならば、しかしそれでは、そもそも奇蹟はないことになる。

痩せ地帯の牧師は、彼の時代とは逆に、永遠に最高の深い内奥部で

自然と交わった。この哀れな男は、そう、彼自身のそして彼の周囲の煩惱から逃れて、この森に避難所を求め、ここ以外に求めることはなかった。林や草原の美しい生命の一つ一つを分類し、彼のラテン語やギリシャ語名で呼び、学識が不足してしまうときには、彼はアダムのものに命名した名に辛抱し¹¹、アダムの流儀にならうていかなる気分るときもそれらが自分に訴えかけるままに受け入れた。彼は一年の季節の刻みを、霧を、雨を、雪を、太陽や月の輝きが、去り行きては、戻り来る様をみた。彼は節くれだった樵の木に身をもたせかけ、木陰によった。そして輝きを放つ大地にまなざしを注いだ。その大地の焦土と流血の場所は、荒廃した野と耕作地は、いまや通常の美の中に消え、そして地面下となっていた。この美を、人間は、この地上から、自分の大切な舞台から、決して取り去ることはできないのだ。彼は、晴れた日、山の斜面の草原に寝そべり、彼の新約聖書の黒い革表紙越しに、神秘に満ちた彼の樅の木の方へまなざしを向けた。そして風の呼吸に合わせ、樅の木が静かに歌うのを聞いた。遙かに遠くまで彼はこの一帯と親交を結んだ。大岩や小さな岩のことごとく、そして、いずれの泉の一つ一つ、林の中の暗く澄んだ小さな沼さえも仲間だった。彼は彼らのところへ行き、まるで友人や親族と交わるように親しんだ。今日はこれと、また明日はそれと、その日の心と、不安な気分や明るい気分が彼を駆り立てるままに親しんだ。彼は説教の三分の一を森で仕上げた。彼は彼の魂を森の奥深くへと運び、それを森に与えた。

しかし、人ならば、彼が彼の心を与えれば、高い祝福が最も過酷な不幸へ裏返る定めでなければ、また一つの魂を返しに受けるはずである。そしてその魂が、ひとりの女性に捧げられるのか、あるいはひと

つの詩に、あるいはまた、現世の兄弟同胞の最善となる偉大な事業や計画に向けられるのかは、みな同じことなのである。いま、森はただ美しく、気高く、愛らしく、敵かであるばかりだった。彼は魂の返しを得なかつたに違いない、かの女性のように、灰色に塗られた黒板のように、そして白い紙の哀れな一頁のように。フリーデマン・ロイテンバツハー牧師は木陰にいようと、陽だまりにいようと孤独であった。自然の美しさ、そして穏やかさや愛らしささえもがどこかで押し殺されていたに相違なかつた。

長い年月というもの、フリーデマンは陽気な木霊に声をかけて目を醒まさせてやろうと敢えて働きかけることも忘れていた。彼は、彼の見捨てられた状況をあざ笑う森の声を恐れていた。泉や暗い神秘に満ちた森の沼で水面に映る自分の姿に驚き、逃げ帰ることも度々だった。突然、遠く離れた場所で湧き起こった風が梢を伝って走り抜け、彼の長衣の裾をまるで生き物のように掠めて通ると、彼はよく懐き縮み上がった。ヴァルドーデ村の牧師は、六月の燃えるような暑い日、陽光が照り付ける草原の一角にいてさえ、凍えるような悪寒に襲われた。ときには雲ひとつない夏の正午に樅の木やドイツ唐檜から誘い出された芳香が、孤独でさえなければ、若いぶどう酒のように陶酔作用を發揮するはずなのに、彼の心や頭脳を、不意に起きる不安や言いよのない胸苦しさを充たしてしまったので、彼はそのものが支配する領域から急ぎ逃げ出さずにはいられなくなった。そうやって逃れ出て、ようやく開けた野に立つと、彼は深呼吸をしながら、とくとくと脈打つこめかみを手で押さえるのだった。

森には魂（生身の心の精神、訳註）がなく、魂に恋焦がれるという水の妖精ウンディーネさえ、美しいお伽噺に過ぎなかつたので、痩せ地帯（エレント）のヴァルロ

―デ村の牧師には説教の三分の一を森で仕上げるのがようやくであった。取返して、略奪にあつた空っぽの半は壊れかけた彼の小屋を取り巻いて繰り広げられる哀れむべき、半は動物めいた生活のほうで、まだしも自然よりは遙かに多く、説教に寄与したに違いないのだ。さて、いま一六三七年の春のこと、森に一つの魂が生まれ、そして育つていったとき、痩せ地帯の牧師に奇蹟と魔法がもたらされた。

三六年の秋から冬の間は、一貫してコンラート修士は牧師との交際をそれがいかなる形であれ、にべもない態度で、時に不信をすら露わにして拒み続けた。そして義の栄誉の人フリーデマン・ロイテンバッハーは、挨拶にろくに返答も返されないうまま、高い縦の木の一角を、臆病と半ば恐れる気持ちから、避けるようになり、彼の脚は別の方向へとむいた。しかし、三七年の春も終わりのころ、太陽が西の地平線にすでに傾いていたある夕べのこと、よそ者の男が精神の世界に住むこの男に、突然、出くわすことがおきた。そして初めて、たとえ不機嫌気であれ、慇懃に彼に挨拶をしたのだ。彼は薬草のヒュベリウム、通常、オトギリソウと呼ばれている薬草が群生しているところをご存知ないか、あるいは採取できそうな場所でもよいのだが、お教えただけなにかと尋ねた。彼は彼の質問をしつこく繰り返したに違いなかった。というのも、牧師はいきなり茂みから現れるという遭遇の仕方と彼の弁舌にすっかり動転してしまい、彼の言っていることが、最初、耳に入つてこなかったのだ。しかし、確かに彼は、神が、いかなる場合も薬効を発揮し、癒しもすればもちろん有毒でもある、その薬草を彼の森にもお生やしにならなければならないことを知っていた。太陽の当たる場所であれ、日陰であれ、峻り立つ岩の陰であれ、泉のふちであれ、神がお生やしになられているところとあらば何処でもよく

承知していた。ヒュベリウムの素性と効能についても彼は通じていた。この修士の男とその場所に向かい、彼は採取を手伝った。そこで結局、一言にはいま一つの応じることが必然となり、ふたりの男は互いの孤独から一歩踏み出し、互いに歩み寄ることになった。牧師は、幼い娘が厳しい冬の始まりからこつち、小屋で病に臥せていること、そして、新しい春がめぐつてき、天候のよい日が訪れたにもかかわらず、それを楽しむことはおろか、普通の状態に戻らないことを知った。よそ者の男は誉れ高き僕フリーデマン・ロイテンバッハーが万事につけ、何事も誠実なことばで偽りなく正直に語る男であり、且つ有益な助言をさえし得る男であることを知った。こうして彼らふたりは彼ら自身ほとんど気付かない間に、小屋の近くまで戻って来ていた。そうしてコンラートが牧師を招待するということが必然的に生じた。援助して建てた屋根の下へ、彼は入って行き、病気になった少女を見た。牧師はヴァルローデ村の住民をひどく気味悪がらせた調度品や住人の空間に初めて足を踏み入れたのだ。彼は本にいくらかの数学や物理学の器具を見た。そして、病気の少女を見た。彼女は熱に浮かされた大きな濃い青い目でベッドから彼を見つめた。そして、彼の姿と顔の探索がすむと微笑んで、かわいらしく頭で挨拶をした。ヴァルローデ村の牧師の目をまず惹きつけたのは本や器具であった。まるで旧知の立派な、そして久しく再会を恋焦がれていた知人に、本当に長い年月を隔ててようやく会うかのように吸い寄せられた。しかし、もし少女の目が許してくれるのであれば、それらよりももっと大きな悲哀と感動をこめて彼女に挨拶をしたいところだった。この二つの濃い色をした子どもを眺めながらこの男に向けて放たれた魔法とは、神のことばに仕える僕、学者、あまりに多くのことに耐え、そして、知る人間であ

る男に向けられて発せられた魔法とは、決して抗しきれぬ質のもではなかった。このときから、この瞬間からフリーデマン・ロイテンバッハーはコンラードウス修士の小屋に呪縛された。すなわち、この瞬間から大きな森は魂を手に入れたのである。そして牧師はもはや森から逃げ出す必要はなくなった。なぜなら彼は孤独であつても、怯える必要はなくなったのであるから。この子はこの痩せ地帯^{エレント}の男にとつて神の啓示であつた。これまで彼の知るどころではなかった、しかしながら、臆げに心締め付ける、定かでない憧れを、ずっと心に抱き続けてきた存在^{ダイザイン}の啓示を教えた。この子は、この地上や痩せ地帯ヴァルローデ村の牧師の心にはかかる残忍な重荷について何ひとつ知らなかった。

娘が軽やかに明るくこの聖職者に対するようになった後も、なおしばらくの間、コンラードは心閉ざし、陰鬱なままであつた。学問のある男の学問のある男への働きかけが効を奏し始めたころ、ようやく、徐々にではあつたけれども、彼の人生の出来事へ一歩深く踏み込むまなざしを受け入れるようになった。不幸は当時、荒々しく暴力的な尺度で計り、そのあまり人間を襲う驚愕と苦痛は強大すぎて、残忍な破壊力といった言葉では、到底、言い尽くせない桁外れのものであつた。この修士の男は決して自分の名を明かさなかつた。が、しかし、彼の受けた運命の数々を、数年経つあいだに、断片的にであれ、語つた。それを聞くことは、心を震撼させることであつた。しかし、わたし達は彼の話を書くことを目的としていないのだから、この報告話をただ簡単にお話することにとどめよつ。

彼は、かつて、不幸な町マグデブルクの司教座聖堂附属学校の教師¹²⁾であつた。家もろとも、夫人と年長の子二人を一六三一年五月十日の¹³⁾

火災で失つてしまつた。運命が、末娘だけを連れられた彼自身を千人の悲しみ嘆く人々の渦の中へ引き込み、こつたがえす聖堂の中へ飲み込んでしまつた。その彼らに皇帝軍の將軍ヨハン・ツエルクラス・フォン・ティリーが、贈つたもの一切とは、死ぬほどの恐怖の三日が過ぎて、唯一彼らから奪わなかつたもの、即ち、生命だけだつたのである。この司教座聖堂学校の教師の名前も、大破壊に遭つた町の最後の生き残りの住民たちが、川下の町々、村々、小さな集落に至るまで、はるか河口の都市ハンブルクまで、そのすべての住民たちに、敵が通りを片付けるためにエルベ河に投げ棄てた六千人¹⁵⁾の同市の市民、親戚たちの死体を森や野の動物に渡すのではなく、もし流れがそうした遺体を彼らのもとへ運んでいくことがあれば、是非とも、キリスト教徒らしく慈悲深く埋葬してくれるようにと切願した書面の中にあつた。

四年間、コンラートは廃墟の中で暮らした。最初の麻痺したような虚脱状態に続いて、潰滅的な絶望感がやつてきた。これに続いて癒しがたい、心を掻き毟る、日増しに増大する憂鬱が襲い來たつた。黒く焼け落ち、人血をどつぷりと吸つた町の彼の身の回りのここかしこで新しい生活が始まつたが、彼には何の意味をなさなかつた。廃墟のなかを徘徊する打ち殺された三万の男や女、子どもたちの霊は、この少数の快々として楽しまない生き物を生きながらに亡霊にしてしまつた。おまけにこの沈んだ街陰には、太陽すらも、煤に黒く汚れた石壁や半ば炭化した柱の中からゆっくりと目覚めていつた新居住区越しに、光を差し込んで来ることはなかつた。やがてペストが廃墟に同居し、勢いを衰えさせることはなかつた。新たに戦争の嵐¹⁷⁾が押し寄せてきた。ワロン人とクロアチア人がかつての古い突破口と突つ切つて、侵入してきた。市門の扉は五月十日以来、地面に倒れたままだつた。市門を

通つて例の通り、擻猛に侵入してきた。この学者先生は自分の講座を再開しようとしたが無駄なことであつた。半分残つた町に繰り返された劫掠後、四年して、コンラート教師は町を出て、森へ向かつた。人間から、世の動乱の渦から完全に逃げ切り、自分の子を混乱や時代の罪業から救い出すためだつた。私は、痩せ地帯のヴァルローデ村の人々や彼らの牧師フリーデマン・ロイテンバッハーが彼を手伝つて高い樅の木の傍に小屋を建ててやつたときの様子をすてにお話した。そしてそこで彼が隠者の生活をどのようにして始めたかも語つた。

この吹雪はいつたいそもそも終るといつことを知らないのだろうか。ますます荒れ暮り、白い重荷を森と村のうえにじわじわと増し加えていつた。枝は音をたてて折れ、軋んだ。幹は強く大きな音をたてて弾け折れた。風が息を入れて休むごとに、狼が吠えた。しかし、自然の猛威を貰いて、フリーデマン・ロイテンバッハー牧師の耳にはある歌声が響いた。樅の木のエルゼの歌う歌の一節だ。

長い、長い十四週の日々、

連合は風^{リーガ}に継ぐ風、

長い、長い十四週の日々、

城の壁に、家の壁に、塔に吹き荒れた

勇敢で信仰篤きドイツの民は

信仰と名誉と家を守りぬいた。

三万の邪教徒の生命を

今日、教会は根こそぎにする

町を勝ち取れ、一切を分捕れ。

そして皇帝軍の大將は言つた
エルサレムが滅んでこのかた
このような勝利を見たことはあるまい

聖母よ、神の御母よ

感謝と栄光を、汝に名誉を。

トロヤを征服して以来

こんな勝利をもはや見ることはあるまい。

しかし、この歌は、樅の木のエルゼが歌っているこの歌は、ただ単なる歌ではないのだ。それどころか多くの別の意味が含まれている。音符も、ちょうど、ひとりの人間の手が紙片に向かつて一巻の本を文字で書きあげるように書く、そういうものでは決してないのだ。樅の木のエルゼ、美しい少女、樅の木の少女、彼女はこの世の悪行や騒動によつて突き動かされることのない森の中、痩せ地帯の土地に住んでいる。樅の木のエルゼ、この世の灰色の砂漠に咲く最も清らかな、最も気高き花、樅の木のエルゼ、深い森の魂。フリーデマン・ロイテンバッハー牧師は両手を顔の正面で打ち鳴らさずにはいられなかつた。彼は苦い涙を流さずにはいられなかつた。冬の風の夜は、しかし、遂には終りに達するに違いない。だが、彼の人生にいま吹き荒れる夜は、彼がこれからも生ある人々の間をさまよう限り、終ることはあり得ないのだ。

樅の木のエルゼが子どもだつた頃、彼の傍らに座つて、彼が彼女の厳格な父親とこの世界の情勢や貧困について極めて真剣な会話に打ち込んでいるとき、彼の膝の周りで遊んでいた。彼は孤独な生き方を送るうちに若いまま歳をとつていたので、彼は彼女と同じ子どもであり

えた。そして、彼女の子どものらしい心のなかには、彼の胸で共鳴しないものの音など一つとして鳴り響いていなかった。彼は、まるで夢見る者のように、いつもひっそりとこの侘び住いを訪ねるほほえましい訪問と彼の哀れで愚かでもある罵りあう蒙昧な民衆の元への帰郷との往来を重ねた。この小さな少女と共に暗い森の小さな沼のそばに座ると、それは水面に映る自分の姿に怯えて逃げ帰ったときはまるで異なつた。たつぷりとした水に映る子どもの笑い顔は決して幽霊のようではなかつた。エルゼの傍らにいるとき、もはや自然の高い神秘性にぞつとしたり、凍えたりする必要はなかつた。 樅の木のエルゼは動物や風、光、その他あらゆるものことばを理解した。牧師よりはるかに上手に理解し、その子から牧師は、その子が彼から学ぶより以上のものを教えられたに相違なかつた。

春から春へ、徐々に若い魂が開花していき、またフリーデマン・ロイテンバッハ牧師の胸にもさらに多くの、さらに高い神秘が解き明かされていき、やがて、樅の木のエルゼが娘のなかでもっとも美しい娘として成長したとき、痩せ地帯の牧師も彼女とともに成長を遂げた。そして彼の年齢に関係なく、彼女と同じように若かつたのである。それは言語道断なこと 警えようもないほどの苦しみであった。永遠に沈むべきと定められた生命のこの輝きを、この優雅さを、今宵、冬の嵐の夜に思い出さねばならないとは。

昨日、また森は緑であつた。昨日まで花のすべては咲き誇つていた。泉はすべて小躍りしながら流れていた。昨日、まだ樅の木のエルゼは一年の優美さの中を歩いていた、そしてフリーデマン・ロイテンバッハも一番高い山の頂上から、遍く広がる、花咲き煌めく地上の崇高さを眺め渡した。そして目と心が届く限り見渡して見ても、樅の木の

エルゼより崇高なものは何ひとつなかつた。

平原を過ぎる軍隊の列が描く黒い、恐ろしい縞模様は拭い去られた。ヴァルローデ村の牧師の手首の関節に残された線条の赤い傷痕は神の御約束の印でもあつた、ちょうどブニエルの地でヤコブの換骨部に天使が掴んで残した傷痕のように。その意味は、わたしは神を見た、そしてわたしの魂は癒されたのである。

昨日、昨日。誰が、いつたい、この短いことばに埋め込まれた悲嘆を測ることができるといふのか。それは千倍に膨れ上がった恐怖で我々を不安に陥れる妖怪じみた明日を産み出す貪欲な喉なのだ。我々の生活を維持するいつさいを一呑みにする暗黒の奈落は、我々自身さえもその奥底まで引きずり込んでしまうのだ。

昨日、樅の木のエルゼは春と生命の光の中を歩いていた。そして今日 今日、痩せ地帯のヴァルローデ村の牧師はクリスマスの説教を彼の村のために書いている。この村によつて樅の木のエルゼは殺害された。

そうなのだ、これは乙女の死の物語なのである。

一六四八年の聖霊降臨祭後の五週目、²⁰洗礼者ヨハネの聖日にフリーデマン・ロイテンバッハは荒れ果てた教会で聖餐式を行おうとした。そしてその前日、コンラート教師は彼に森でこう語つた。自分は子を連れて、聖なる興義に加わるために山を下りていく。と。そして、娘は父親のこのことばに頷き、微笑みながらこう付け加えた。

「ええ、そうですね、牧師様。私たちは森から出かけて参ります。そして、聖なるお勤めの後、あなた様を一緒に森へお連れ致します。明日は私の誕生日です。その日を私のために、あなた様はお祝いくださらなくてはなりません。あなたは小さな花束と韻文で書かれた祝

辞とをこ用意下さなければいけませんわ。」

誉れ高き僕フリーデマンも微笑み、頷き、そして言った。彼は森への道すがら、花束にする花と花に添える祝辞のための脚韻詩を見つけてよう、気をつけましよう。

それから彼は、月が昇った頃になって、別れを告げた。彼が大岩のところまで振り返ったとき、白い月光の中に優美な姿が立っているのが見えた。その傍らには飼いならされたノロシカが並んで立っていた。そしてこの年最後の小夜啼鳥²¹が最後の歌を歌っていた。牧師が森から抜け出たとき、村のあなたの山々の嶺に遠く稲光が走った。その閃光が明るい光を放つのを彼は見たが、しかし、彼は雷鳴を聞かなかった。一晩中、彼は不吉な不安に満ちた夢にうなされた。そして、蒼ざめた影絵の世界からぎくりとして跳ね起きたとき、半覚醒状態のなかで、彼の苔むした屋根や窓外を絶え間なく叩きつける激しい雨音を聞いたように思った。しかしながら、それは間違いだつた。たまたまはや差ほどでもなくなつた風が夜半、真夜中に木々の間をざわざわと騒がせているだけのことであつた。早朝の太陽は雲ひとつない天空に昇ってきた。そして晴れた夏の日の軌道をたどつた。

小さな教会の鐘をクローアア人たちが持ち去ってしまったので、もはや共同体を呼び集める役を果たすことができなくなつていた。牧師館から一人の子が遣わされ、小屋から小屋へ走つて、神の言葉にお仕える準備が整つたことを告げてまわつた。

村の子の召集は受けなくとも、日の出とともにコンラート教師とエルゼは彼らの小屋を出発した。愛情込めて朝の太陽が森を照らした。愛らしく小鳥たちが木々や草の間を、青空を飛び回り騒いでいた。泉の一つ一つが飛び跳ね、楽しげに元気いっばいに聖ヨハネの日へあふ

れ出していった。

飼いならされたノロシカが美しい女主人の同伴をして陽気に飛び跳ねていた。そして体を摺り寄せ、ぴったりと並んで森を抜けていった。そして元教師の父親はと見ると、今では白くなつた立派な鬚をたくわえ、長い杖を手にまさしく姿は本物の魔法使いのようであつたけれども、魔の力の呪縛と荒ぶる力から救出された王の子を森を抜けて連れ出す善きものに似ていた。大きな森の縁までノロシカは嬉しそうにダンスでもするかのように女主人に随つていたが、森はずれの最後の木立の最後の跳躍を陽気に跳ねて、いきなり明るい太陽の光の中に飛び込むや、急に怯え、^{すく}竦んで後ずさりをした。ぶるぶると震えながら、立ちすくみ、かなた下の村をじつと見つめた。そしてノロシカはまったく今までに見たこともない奇妙な風を呈し、なんとしても、この娘がそれ以上先へ進み、緑の木陰を去ることを許すまいとした。いろいろとため、愛撫してもいっこうに鎮まらず、ますます激しく、頑強になるばかりであつた。とうとう、コンラート教師にほとんど力づくで、脅しつけられ、追い払われねばならないことになつた。ああ、ノロシカはただ自分の言語で語つたのだ。しかし、傲つた人間はその言葉を理解しなかつた。しようとなさしなかつた。木立の下で憂い顔で佇み、貧弱な耕地の間を縫つて村へと続くうねうねとした道を歩いていくコンラート教師と美しいエルゼの後姿を見送つた。それからノロシカは荒々しく疾駆し、木立を抜け、深い森へと姿を消した。どんなに不安と恐怖の苦悶に捕らわれていたことが。

すでに父と娘は畑中の道を人々といっしょに歩いてきた。彼らはこの親子の挨拶に応えようとはしなかつたし、親しげに話しかけることばに応じもしなかつた。そして恐怖と邪推でいっばいになりながら、

顔をそむけ、脇へ退き、距離をとってこつそりと歩いた。彼らのまなざしや拳動はノロシカが目が示したよりもつと明瞭に警戒の色をあらわにしていた。しかし、歩いている村人達は自分の体で行く手を阻み、制止しようとはせず、ただ、ゆっくりと歩いていった。誰もがめいめい自分の考え、自分たちの目的にだけ深く囚われていた。

教会の道の傍にひとりの老婆が座っていた。その女の評判は、悪魔のような意志力と能力をもつおかげで悪くもあつた。しかし、その力はいあまりに恐れられていたので、この女を虐待することはなかった。この年老いた女は乙女が通り過ぎようとしたそのとき、膝から顔をあげて、やせ細った手をあげ、指差しながら、かさかさの声でこつ叫んだ。

「お気をおつけ、お気をおつけ、娘さん。お前の若い生命にお気をおつけ、かわいい子。お前の影がお前のまえを歩いている、お前の影に躓くな。躓く者は己の影に落ちるのだ、そつすりや、だれも再び立ち上げはしない。」

コンラート教師はただ憂わしげに頭を振った。しかし、樅の木の工ルゼは感謝し、頷いた。彼女の背中に老婆はかさかさ声で歌う。

かわいい娘のとんとん音する機織り機、⁽²³⁾

そいつがお前に生きてるうちから死を告げている

そんなに白く優美な顔、

考えてもご覧、日差しの中の影のこと。

それから、彼女は顔を再び膝にうずめた。

教会の前の墓地で、痩せ地帯のヴァルローデ村の会衆が彼らの説教

者を待つていた。年老いた人々は互いにおしゃべりをしていて。若いものたちは戯れ笑い声を立て、からかいながらしゃべっていた。しかし、コンラート教師とエルゼが姿を現したとき、それら一切がぶつとりと止んだ。そして、民衆の中にこのような変化が生じたとき、初めて、彼女は彼女のノロシカが見せたとはほ同様の不安に襲われ、父親に身を寄せた。すると父親は何気なく彼の杖を防御するようにしっかりと握りなおした。

「魔女だ、魔女だ。魔術師だ。」はじめは密かに、それから次第に声高に、周りを取り囲む輪となつて、人々のあいだに伝わっていった。「彼らはここでいったい何をしようというのか。なぜ、彼らは隠れ家から出てきたのか。彼らは村へなんぞ下りてきてはいけないのだ。彼らを打て、そこから追い出せ。彼らを燻し出せ。」

この瞬間、フリーデマン・ロイテンバッハー牧師が教会の中庭に姿を現した。すると彼もまた考え物なのだがという視線で眺められた。そして興奮した教区民たちによって、この二人のよそ者に教会の中庭へ、教会内へ立ち入ることを禁じるようにと、恐喝的に詰め寄せられた。彼の神聖な職や黒い説教師用長衣も、捧げ持った聖書も、彼の怒り猛った抗議のことばの遵守や従順を生み出す助けにはならなかった。コンラート修士にもそして美しい娘にも神の社への自由な道を敷いてやることができなかつたのも同様であった。彼が乙女の手を掴んで踏みじられた階段を上つて行くやいなや、村人たちは拳を固めて振りかざし、叫び始めた、まるで今にも青空を引きずり降ろさんばかりに。

しかし、痩せ地帯の牧師はなにも見ず、聞きもしなかつた。ただ、心臓を早鐘のように打たせたまま、樅の木のエルゼを彼の神の家へ導きいれ、まるで夢遊病者のように、最後の破壊後に粗末ながら整えら

れた説教壇に向かつて、登っていった。会衆の大半が彼の後を追って教会の中へ押し入った。そして不平と怒号で充たした。

緑の小枝が焼け焦げた天井や破れたガラス窓の隙間から、壁の裂け目から墓の手を差し伸べていた。緑と太陽と空気をいっぱい孕んで、ちらちらと輝き翻り、葉擦れの音をたて、小鳥の囀りを紛れ込ませながら、溢れる生気を送り込んできた。好天の目映いばかりの日中であつた。これらと一緒に、エルゼの顔が説教壇の下で愛らしく輝いていた。そしてフリーデマン・ロイテンバッハー牧師は彼の会衆の顔を見なかつた。彼はまるで森の中にいるかのような気分だつた。安全で、太陽が照らし、魂が宿る森の真つ只中にあるかのような心地がした。そしてただ縦の木のエルゼだけを相手に語つた。そんな風に彼は、彼の聖ヨハネの日のための説教を始めた。そして、その同じ時に、教会の扉の外で起きていることを知らなかつた。

そこでは若い女が新しい墓へ飛んで行き、そこから手三杯分の土を掴み取り、教会の扉の敷居の上に振り撒いた。二〇歳の粗野で、粗暴な感じの男は燃え落ちた村の住人の家の菩提樹のもとへ走つて、四四年にハツツフェルト將軍の冑騎兵が町長を縛り首にした木からやせ細つた枝を折り、息もつかず走つて、彼はそれを運んで帰つてきた。そして聖具室の敷居に投げつけた。いまや魔女と魔術師の親子は神殿のなかに封じ込められた。新しい墓の土と縛り首のあつた木の枝が両方の敷居の上にある限り、不浄の脚はそれを踏み越えることはできない。

胸の高鳴る期待のなかで、教会の中庭にもどつた瘦せ地帯のヴァルローデ村の人々は、いまにも起きるであろうことを待ち設けた。ひとつの魔術がいまひとつの魔術によって打ち破られ、効力をうしなわせ

しめられるのだ。炎天下、墓の上やあいだに座つたり、立つたりして二つの入り口に目を釘付けにし、凝視し続けた。彼ら自身が、意地悪で他人の不幸を喜ぶ背信的な魔物やコーボルトと瓜二つとなつていった。

教会の中では説教師フリーデマン・ロイテンバッハーがこの世の代償に滅ぼされた肉と、この世のために注がされた血を授けていた。エルゼの死に加担した罪を負うものたち全員が乙女の唇が触れた杯から飲んだ。

牧師が粗悪な錫の水差しを乙女の甘い唇に差し出したとき、神聖なおのきが、果てることのない至福を願う感情が、彼の身中を貫き、さらさらと流れ抜けた。大地と同様、魂の中に平安が宿つた。彼の生涯はあらゆる戦争の最も恐怖に満ちた戦争の只中で尽き果てたものではなかつた。全存在の無上の喜びがこの唯一の瞬間に注ぎ込まれたのだ。そしてこの瞬間が過ぎ去つたとき、フリーデマン・ロイテンバッハーはこの地上でもはや期待すべきものの一切が消失した。

重苦しい、惑乱に取り憑かれてざわめく彼の会衆たちが教会から転がり出てきた。そして教会の中庭に残つていた人々は、口々に魔女と魔術師を捕えて拘束するために準備万端整え終えたと叫び、彼らを迎えた。動物的な狂気と悦びの聲が上がつた。民衆は教会の扉のまわりを取り巻いた。

教会の中では、牧師がコンサート教師とその娘のもとへ歩み寄つた。彼らは外の叫び声を聞いた。聖なる僕フリーデマンはよそ者に、しばらく、哀れで見境のつかない愚か者が家に帰り、道が空くのを待つようにと求めた。彼はこの遅滞が、迫つた危険をどんなに増大させるか少しも気がつかなかつた。待ち伏せしていた人の山の不吉な予想は確

信へと変った。いまや教会の中庭にいたれども、このよそ者たちが悪と関係しているものと信じ、疑わなくなった。そして熱心に薪や割り木、粗朶の束を彼らの割り木の山の上に更にまし加え、これを運ばなかつたものはひとりとしていなかった。

「呪縛されたぞ。呪縛されたぞ。彼女は出て来られなくなつた。彼らは出て来られない。魔女。魔女。魔女。キリスト教徒の名において我々は彼らをもはや赦さなくてもよいのだ。呪縛されたぞ。呪縛されたぞ。」この言葉が口から口へと伝わつた。そして顔つきやそぶりはますます野蠻となつていった。困いの柵や垣根を引き裂いて、棒切れを作り、地面から石ころを拾つた。近くの小屋から斧や唐竿、肥やし熊手をもつてきた。

「呪縛されたぞ。呪縛されたぞ。魔女だ。魔女だ。魔女だ。彼らは出て来られないのだ。彼らをひつ捕えろ。彼らを打ち殺せ。チンピラ魔術師と魔女の親玉を牽き立てて、火にくべろ。」

「彼らは去りはしないでしょう。」とコンラート教師は言つた。そしてエルゼは頷き、小さな声で言つた。「神がわたし達をお守りくださいます。いつもと同様、今も。だからほんとに私どもを行かせて下さい。」不吉な予感が牧師を捕えた。すでに父親と娘は玄關に向かつていた。彼はただもつ彼らに追いつくためにできる限り急いだ。彼の黒衣と権威によつて彼らを保護できるようにと。

父親と説教師のあいだに立つて、樅の木のエルゼは敷居へ一歩踏み出した。しかし、彼女に攫みかかつて叫声と怒号を前にして、彼女の勇気のすべては挫けた。血の気が彼女の頬から失せ、恐怖のあまり血は粗暴な奔流のように心臓へ逆流した。彼女は泣きだし、発作的に父親の腕をつかんだ。そしてほとんど失神状態で、敵意に満ち、害意を

剥き出しにした怒声と心を震撼させる叫び声を鈍く、耳にした。

「魔女。魔女。魔女。彼女を打ち殺せ。打ち殺せ。」

両手を高くあげ、説教師フリーデマン・ロイテンバッハーは黒い長衣を着たまま前に飛び出し、鎮静を呼びかけ、自分の話を聞くようにと叫んだ。

しかしながら、時代の妄想に捕り憑かれ、衝き動かされている会衆は、彼の会衆は、自制心を失い、狂い、逆上し、もはや彼らを天地に繋ぎとめておく紐を見出せない状況であつた。牧師の叫び声はこの騒擾、よそ者の血を求める騒ぎの中では無力であり、何の効果もなさなかつた。

打ち殺せ。打ち殺せ。敷居から引きおろせ。神の国から彼らを引きおろせ。彼らを水車の池に突っ込め。打ち殺せ。魔女だ。魔女だ。打ち殺せ。」

棒切れや石ころ、墓の土、墓堀人のシャベルが掘りあげた死骸、とにかく手当たりしだいの一切合財がコンラート教師と彼の娘そして痩せ地帯のヴァルローデ村の牧師めがけて投げつけられた。絞首刑のあつた木からやせ細つた枝を運んできた男の手から、鋭い角のある小石が飛んだ。そして乙女の左胸に当たつた。彼女は悲鳴をあげて崩折れ、意識を失つて父親の腕に倒れた。赤い鮮血が数滴、彼女の唇から流れた。民衆は、すらりとした神々しい姿が崩折れ、倒れたと見るや、残忍な勝ち鬨をあげた。が、フリーデマン・ロイテンバッハー牧師はとも人間の胸から発せられたとは思われぬ叫び声をあげて、樅の木のエルゼが倒れ、流血が彼女の唇から溢れるのを目にした。彼も村人同様、我を忘れ、もはや自分が何者であるのかの分別をなくした。彼の目の前で、何千という醜い顔が踊つていた。彼の肉体、彼の魂を支え

ていた全神経がこの瞬間に地獄の炎のように燃え上がった。彼もまた狂気に取り付かれ、揺り動かされた。教会の扉の前の階段を駆け降りると、拳で力任せに、縦の木のエルゼの殺害者を地面に殴り倒した。そして別の者からもぎ取った墓掘り人夫のスコップを振りかざして、仰天している民衆に向かって襲い掛かり、墓へ追い払った。混乱し、狼狽し、取り乱して、大多数が逃げ去った。そうして、墓地（神の畑）は空になった。ただ遠くから、息を呑んでヴァルローデ村の住民達は墓地の入り口とそれを取り巻く壁に、無表情に、据わった目をじっと向けていた。慄き、我に返り、説教師はスコップを取り落とし、負傷した乙女に寄り添う父親の横に跪いた。

色蒼さめ動かない、眼を閉じたままの、しかしながら、苦痛の影を微塵も留めぬ面差しの縦の木のエルゼは父親の腕に抱かれて、教会玄関の階段に横たわっていた。騒動で墓地の木々から追い払われていた小鳥達が戻ってきて、枝から枝へと飛び交い、囀りながら、小首をかき上げて興味深げに、静かな悲しみに満ちた一回を見下ろしていた。しかし、彼らは先ほどの興奮や恐るべき騒擾の意味の幾ばくかさえ知る由もないのだ。ただ無心に、再び、陽光に溢れ、緑したたる枝の間で彼らの快活な夏の間を楽しみ戯れていた。修士と説教師は意識を失った乙女を先ず牧師館に運んだ。そこで彼女は暑い日中を過ごしたが、一度も意識を取り戻すことはなかった。夕方が近づくと頃、ようやく彼女は目覚め、深いため息をついて、もの問いたげにあたりを見回した。ゆっくりと記憶が戻ってきた。正気になったときエルゼは怯え、身を震わせて再び、無垢の眼を閉じた。夕方の穏やかな冷気のなかをコンサート教師とフリーデマン・ロイテンバッハー牧師は傷を負った娘を彼女の希望通り、森へ連れ戻した。彼らはただただ苦惱に充たされて

いた。

朝、路傍に座って、警告の歌を歌った老婆以外だれも彼らの後を歩いて行くものはなかった。夕陽が真っ赤な光を投げかけていたので、乙女の額がどんなに蒼白であったか気づきはしなかった。軽々とした荷を運ぶ運搬人の一行が深い森の最初の木立の場所へたどりついたとき、月が昇った。ノロシカが立ち、女主人の帰りを待っていた。

「主は私を暗闇の中に落としてしまわれた。この世の生きながらの死者たち同様に」と、痩せ地帯のヴァルローデ村の聖なる僕フリーデマン・ロイテンバッハーは繰り返した。彼の食卓に歩み寄り、一六四八年の聖夜の祈りを捧げ、三度十字を切った。マルティーナはいまようやく小さなランプをテーブルの上に置いた。なぜってお尋ねすることもなく、黙々と彼女は丸パンとナイフをお祈りと並行して整えた。

白猫が牧師の椅子に正座し、緑色に輝く眼で灯りとパンを見つめた。この瞬間、誰かが窓をこつこつと叩いた。尊敬すべきフリーデマンは、死の手が彼に触れでもしたかのようにぎくりと身をすくませた。つかの間、彼は躊躇したが、しかし彼は窓扉を開けた。風が彼の手から窓扉をほとんどひきちぎった。吼え声をあげて嵐は小部屋へ押し入り、食卓の上まで雪を飛び散らせた。ランプは消えた。説教原稿の頁はてんでに吹き飛ばされ、部屋の隅で渦を巻いていた。吹き飛んでしまった文章といっしょに猫も竈の傍へこそそと這いこんでいった。「そこにいるのはだれです。こんな時刻にどうしようというのです。」と、牧師は呼びかけた。瘦せ衰えた二本の手が窓枠を這い登ってきた。老人の喘ぐかすれ声があった。

「私に知らせのご褒美にパンをおくれ。縦の木のエルゼは今夜、死ぬよ。」ヴァルローデ村の牧師は声を失くした。彼は苦しげに崩折れ

両膝をついた。そして同時に窓枠の手をつかんだ。外の声はなおも続いた。

「美しいエルゼはきつと死ぬ。しかし、わたしにはどうすることもできない。私にパンをおくれな。狼はわたしの行く手を妨げやしない。倒れる木も私に当たることはない。雪だつてわたしを森に降り込めはしない。私はこんなに年寄りだ。こんなにも年寄りだというに。そしてあの美しく若いエルゼは死ぬ。私にパンをおくれ。」

牧師は再び立ち上がり、機械仕掛けのように手探りで進み、美しく若い娘エルゼの死を羨む、外にいる化け物のような女に黒パンとナイフを渡した。

「神の御名とすべての善き聖霊の御名において感謝します。」と、その声は軋るような声で言った。それから新しい一陣の強風が吹き、新たに数ラストの雪を巻き上げ、激しく吹きつけたので、牧師館の向かい側の小屋小屋の灯りは完全に掻き消えた。いまや、この者を運んできたときと同様に、いま一度、この新たな突風が老婆を追い払ったとき、ほぼ、暗闇となった。

空しく説教師はそのものの名を呼んだ。彼の声の響きはざわめきとシューツシューツと吹きすさぶ風に飲み込まれた。だれも答えなかつた。つかの間、いまは全く人間の声ではなかつたのは、あの老婆、聖ヨハネの日、路傍に座っていたものの声ではなかつたのではなかつたか、あの樫の木のエルゼが死ぬという伝言を窓から甲高く軋む声で彼に伝えたのは人間の声ではなかつたのではないかという気がした。嵐雲を運ぶ悪霊が彼の耳にそれを叫びこんだのだ。人の声があんなふうにくたく、残忍な驚愕を送り込むなんて事はありえない、このような恐ろしい破滅を運んでくるはずがない。

エルゼ、美しく若いエルゼが死ぬ。エルゼが死ぬ。エルゼが死ぬ。痩せ地帯のヴァルローデ村の牧師は両手で額をしつかりと蓋つた。だが、それが真実か。やって来ずにはいられないというそのときののか。あの洗礼のヨハネの聖日以来、ゆつくりと、脅迫的に避けがたく忍び寄っていたそのときが来たのだろうか。

「彼女が死ぬ　　樫の木のエルゼが死ぬ。」牧師は呻いた。彼はドアのほうへ手探りで進み、よろめき出た。

マルティーナは玄関のたたきで彼女のランプを手を立っていた。「とんでもございません、ご主人さま。いったい何が起きたというのです。いったい何をなさるおつもりでございますか、ご主人様。そのままいらっしゃるおつもりでしょうか。この天候の中を。」

フリーデマン氏は忠実な召使に全く気づかない風であった。彼は彼女のそばを通り抜け、家の前に、暴風と深い雪のなかに立った。マントで顔を覆い、村を通り抜け、風と渦巻く吹雪に向かって、森へと歩いていった。館の犬の吼え声が彼の背後で響いた。彼は荒れ狂う夜に、狂おしく取り乱した自分の考えだけを胸にただひとりであった。

森と村のあいだの空き地は風が雪を一掃し、痩せたむき出しの黒い地面がこの奇妙な薄明かりの中にただ横たわっていた。この風が絶望的に行く手を阻んだ。風は意志あるものかのように胸を破裂させようと、呼吸を胸奥に押し戻し、彼を地面に引きずり倒そうと、マントの襷を引っつかみ、強暴に髪の毛に攪みかかかった。暴風は荒れ狂い、跳びはねて、ヴァルローデ村に向かって粗暴に吹き降ろし、白い吹雪を巻き上げ、追い立てた。

牧師は森の縁へたどり着いたとき、彼は地面に身を投げ出したかった、そうして喘ぐ胸から息を吐き出したかった。戦争の轟音のように

荒天が山脈を駆け降りてくる　　うなり声をあげ、呻き、めりめりと音を立て、軋み、地球の果てからのた打ち回ってやってくる。

かわいいノロシカが楽しげな跳躍をみせ、身を摺り寄せて甘えるしぐさで、出血するエルゼを出迎えたあの場所では、雪は人の背丈ほども積もっていた。森の中では、嵐が彼をまるでおもちゃのように追いつてまわすことはなかった。いろんな理由で風は高い塙の陰のように静かであった。ただ梢のほうでは呻き、幹が軋み、ざわつく音が、梢から梢へ、高いところから別の高いところへと渡り行きながら、平原へ向けて吹き降ろして行く気配であった。

子どもたちも気の狂った連中も神の御手がしつかりと彼らの軌道に閉じ込めていた　　だが、ヴァルローデ村の牧師だけは、雪の降り積もった森の彼の軌道をただ奇蹟としか言えない方法で発見することになったのだ。彼の取り乱した頭のなかでいまや不思議なことに、この十一年間の楽しかった春や夏の至福の時のすべてが生き生きと活動し始めていた。彼が胸の深さまで雪に埋まったところ、そこは小さなエルゼが黄色のきんぼうげの花で首飾りを作った場所だった。また大昔のハルバーシュタットの善き司教ブーコーの作った童歌³⁴をヴァルローデ村の牧師に教えてくれた場所でもあった。千年の間、さまざまな暴風雨に耐え、立ち向かった大きな樅の木が倒れた場所は、樅の木のエルゼが若い乙女の美しさの只中を平安と静さに満ちて立ち、平原で生じる遠い、遙かに遠い轟音や喧騒に耳を澄ましていた場所なのだ。そこでは、ケーニツヒスマルク陸軍中将指揮下のスエーデン人たちが皇帝軍と駆逐しあい、互いに闘った。一六三九年、敵の強暴さを逃れて教区民たちが身を潜ませた暗黒の洞穴の入り口の前に、狼が一匹立っていた。が、しかし、このものは、ちょうどあの狂ったユス

ティーネにしたように、この迷い込んだ放浪者にも襲い掛かる気配はなく、哀泣するような声をあげて、穴の奥へ避けるように戻っていた。

牧師が高い樅の木の一帯にようやくたどり着いたとき、突然、辺りの大気や梢でざわめいていた騒音がぶつとりと止んだ。そしてフリーデマン・ロイテンバッハーが、太い幹の間を漏れくるちらちらと輝く、コンラート教師の小屋の灯りを目にしたとき、雪は降り止んだ。天地の間を充たしていた沸き立つ騒音の後に、完全な静寂がやってきた。しかし、この予期せぬ不気味な休止のなかで、真夜中の彷徨者は初めて、越し方の道々で試された超人的な超克力と体力の疲労を完璧な尺度で感じた。脈は激しく打ち、膝と両腕は小刻みに震えた。フリーデマン・ロイテンバッハーは深い息を吐きながら、体をまっすぐに支えるために覆いかぶさる枝に手を伸ばした。彼の呼吸は熱く、喘いでいた。風の暴力に乾き切った彼の目は、火のように燃え、彼を取り巻く雪明りは生き生きと勢いを増した。そして森の暗闇は、彼の熱に浮かされた幻想は数千倍に膨れ上がり旋回する像となって、いよいよ鬼気を帯びていった。彼は不安に包まれ、大声で叫びたかった、が、声は出てこなかった。彼は小屋の穏やかな灯りに辿りつくためには、なおも道中で味わった嵐と危険に立ち向かう苦闘を続けることを迫るかのようには思えた。そのうえ、灯りはどんどん遠くへ、遠く、遠くへと遠ざかっていくかのように見えた。彼は、死に至るまで永遠に消尽しつくす、この名状しがたい不安の中を、ただひたすらその灯りに追いつくため、従っていかなければならないかのようには思えた。

この状態がおよそ十五分間ばかり続いた。それから、先ほど嵐が終ったときのように、その状態ははたと終った。

「樫の木のエルゼが死ぬ。樫の木のエルゼが死んでいる」と、瘦せ地帯のヴァルローデ村の牧師は抑揚なく言った。そしてコンラート教師の小屋から彼を隔てている空間を踏破するために歩み始めた。

高い幹の間のここは、雪はほんの踝ほどの深さだった。小屋を指せば目指すほど、彼は一層激しい力で駆り立てられた。ヴァルローデ村の牧師は背の低く小さな窓への道を切り開くことはほとんど不可能だった。しかし、とうとう成功し、彼は立ち、鋭く眼を凝らして小屋屋の様子を覗いた。窓ガラスだけは、どうやら凍った息を懸命に吹きかけて、ようやくぼんやりと影絵の姿を映し出すことができた。そうして、いま、彼は新たに小屋のドアにたどり着くまでの全く骨の折れる一仕事を始めなければならなかった。

彼はドアをノックした。しかしながら、最初のノックでは、その向こうで何の変化も起きなかった。彼は二度目のノックを繰り返した。すると今度は修士殿の思い足取りが聞こえた。

「そこにいるのはだれです。内には死がいます。生はこの家から出て行ったのです。」

「開けてください、御父さま」とヴァルローデの説教師は言った。コンラート教師は門を引き抜き、フリーデマン・ロイテンバッハは小屋へ入ってきた。教師は無言で背を向けた。フリーデマンは樫の木のエルゼの遺体の前に立った。

彼女はベッドに眠るように横たわっていた。父親がすでに胸に、腕を十字に組ませていた。彼女は微笑んでいるように見えた。蒼白い顔

の安らかさはいつもの表情以上にこの世の快適さ、この世の幸福を映し出していた。

飼い慣らされたノロシカがベッドの傍に立ち、ほっそりした首を、彼の小さな頭を布団の上へのせ、うなだれていた。二年前巢から落ち、エルゼに育てられた白い山鳩がベッドの背に留まっていた。そして蒼白い女主人を見つめていた。

「五時に、嵐が止んだとき、彼女は死にました」と、父親は言った。「私はそんなに早かろうとは思っていませんでした。彼女は苦しむことなく逝ってしまいました。もはや大きな嵐を経験しなくてもよいのです。彼女は死んだのです。」

「彼女が死んだ」と、瘦せ地帯のヴァルローデ村の牧師フリーデマン・ロイテンバッハは繰り返して、ベッドの横に跪いた。コンラート教師は今まで娘の動かぬ頭上に翳っていたランプを腰掛の上に置いた。そしてベッドの足下の暗がりにも身じろぎもせず、佇んだ。

「別れの様子をもう少し離してください、お父さま。私が、昨夜辞したとき、彼女は生きてでしょうと、言ったのです。彼女は自分の心の中の声がそう私に約束したのですと、言ったのですよ。」

父親は頷いた。
「彼女は生きています。彼女が聞いた声は偽りを言ったものではありません。彼女は生きています。しかし、わたし達が死んでいて、彼女と決して再会することがなくなりました。」

戦慄が説教師の全身を走った。コンラート教師は続けた。

「昨晚、夜中に彼女は大変な痛みに苦しみました。私は彼女の手を握り、朝までそばを離れませんでした。朝がやってきたとき、彼女は

眠りに落ち、多分三時間ほどまどろんだことでしょう。それから目を覚まし、私に挨拶をしました。そのときは、もはや昨夜の苦悶の跡はどこにもありませんでした。彼女は自分の飼っている動物たち、ノロシカや小鳩の世話をし、彼らが彼女のベッドの横で食事をしているのを見ていました。しかし、私には彼女が以前よりも病態が悪くなっているのが分かりました。彼女自身はというと、食べも飲みもなかったのです。彼女の声はまるでただの息のようでした。彼女はクリスマスのこととを話しました。そしてあなたの説教のことを心配しておりました。フリーデマンさん、あなたが村の哀れな人々のためにする聖夜の説教のことをね。彼は私のことを考えてはいけないのですと、彼女は言いました。神の愛は万物の上にある、と。過ぎ去ったことは払い落としてしまい、子たちのことに思いをいたし、そして子ども達に向かうように、老人たちに語りかけるべきなのです。わたし達は彼らの森で幸せに住んで参りました。そして彼らがわたし達に石を投げ、私に当たったときも、彼らは自分達が何をしているのか分からなかったのです。³⁶後生だから、彼が哀れな人々にもはやこれ以上怒りを露にせぬようにと願っています。更に、こう言っておりました。私は、彼が、明日、彼らに厳しく説教するだろうと、はつきりそう思うのです。

私は、あなたが昨日、彼女にそのことを約束したことを思い出させました。すると、彼女は微笑んで、そのことは知っていますと、答えました。午後、老ユスティーネが来ました。ヨハネの聖日以来、彼女はわたし達の友人でした。彼女はわたし達の竈で暖をとるためにやってきたのです。そうやって彼女は夕方が始まるうという頃までわたし達のところにいました。病人の容態が悪くなりそうには見えなかったので、わたしは窓辺に腰掛けてプラトンの書ファイドン³⁷を広げてい

ました。砂時計は午後四時を示していました。そのときユスティーネが、突然、叫び声をあげて、両手を挙げました。私は驚いて飛び上がり、娘を見ました。

『死に神。残忍な死に神』と、老婆は狂ったように叫びました。そして小屋を出て、森のなかへ転ぶように駆けていったのです。何干という魔物や恐怖の塊に追い立てられるように逃げて行きました。しかし、死に神は私の子の心臓近くに居座り続け、密かに這い登っていったのです。しかし、私はそれに気がつかなかったのです。彼女は目を見開いて横たわっていました。そして今まで一度もしたことのない様子で私のほうを見ました。彼女は動けず、もはや話せなかった。しかし、彼女は私が誰だかわかり、目で私を慰めようとはしました。

五時頃、彼女は死んだのです。私はかつて彼女を原野の中に匿おうとしたのですが、それも無駄なことでした。ああ、前の世界も今の世界も救いはないのです。五時に、彼女は死にました。そして、大きな嵐が森で彼の声を挙げました。しかし、この声を彼女は聞くことはなかったのです。彼女は安全なのです。そして、生きています。しかし、わたし達を吹き払うがよい。」

今や、痩せ地帯のヴァルローデ村の説教師は遺体から顔を上げた。そして、死んだエルゼの冷たい手に手を安らえさせて、呼びかけた。

「その通りです。私たちが吹き飛ばせ。ことは成れりです。神の意志が完工されたのです。神は地上から彼の御手を除かれ、民人らを追放されたのです。³⁹そしてわたし達を根絶されたのです。わたし達の希望を絶たれたのです。⁴⁰もはやこの世に光はなく、そうして決して再びやって来ることはないのです。私たちは神の力強い御手に逆らい、⁴¹偷盗のように、夜中、わたし達のこの世の最後の宝であり寶石である

ものをこつそり持ち出し、神の目から隠そうと、「こそこそしたのです。しかし、神はわたし達を発見し、わたし達のうえに息を吹きかけ、怒りの鞭で叩いたのです。わたし達を嘲笑し、彼のものであったものをつかみ戻したのです。いったいそれに対し誰が逆らおうというのでしょうか。⁴³それは無駄なことで、⁴⁴努力してみても報われはしないのです。罪と恥の河が突っ切つて流れ、逆巻きあわ立つに任せなさい。神の意志に逆らつて、⁴⁵なおも誰が堰を設けようとするでしょうか。主はこの地上を蔑まれたのです。そして彼の嘲笑に奈落の深みで反キリスト者が聞き耳を立て、立ちあがり、彼のものたちに呼ばわつている。目覚めよ、目覚めよ、汝、夜の暗闇よ。神の御影はこの世から去られた。門のところへ行け、汝、暴力なるものよ、地獄の門を突き放つがよい。王国は我がものなのだ。⁴⁷」

「神の御影はわたし達を置き去りにしてこの世から出て行かれたわたし達にとつての最後の小さな火花も消えた。私の子は生きています。しかしわたし達が、息をしているわたし達が、死者の足の下に伏しているのだ。」

フリーデマン・ロイテンバッハーは立ち上がり、もう一度、死んだエルゼに深いまなざしをじつと注いだ。それから小屋から出て行った。コントラト修士は彼を留めようとはしなかった。彼は、どこへ行くのかとも、尋ねなかった。彼は、ヴァルローデの説教師が彼を娘の遺体のそばに一人きりにしたことも知らなかった。

風が声を、再び、あげた。しかしながら、以前ほど大きくはなかった。輪を描きながら、フリーデマン・ロイテンバッハーは樅の木の傍に立つ小屋の周りを歩き、両手を揉みしだき、名前を呼んだ。

「エルゼ。エルゼ。」

彼に応答する者は誰もいなかった。そのうえ、木霊さえも森の雪が窒息させてしまったようだ。夜はいまやあの恐ろしい夜と同じように暗かった。説教師は彼の懊惱の中でなんと乱暴に夜の接近を告げてしまったことか。小屋の灯りが、突然、消えた。ランプが消えたのか、あるいはコントラト教師がそれを別の、陰になる場所に置き換えたのか、それはどうでもよいことだ。尊敬すべきフリーデマン・ロイテンバッハーは原野の中に迷い込んだ。

彼はさ迷い歩きどこへ向かうかも分からなかった。

深い雪の中を通り抜け、剥きだしの原っぱを越え、山を上り下りし、遠くへ更に遠くへと、彼の魂の最終のない不安が彼を駆り立てた。彼は倒れ、起き上がった。両手に擦傷を、服と顔に棘の引っかき傷を負った。彼は新たに地面に沈み込んだ。そしてもう一度言った。

「彼は私を暗闇に置いた、この世の死者さながらに。」

次第に冷たさが厳しさを増した。ただもう一回だけ、この不幸者は立ち上がり、よろよると歩くことに成功した。彼はそれと知らず、ますます谷を抜け、高く上つていった、あの高みへ。そこからは大地を見渡せる森の一番視野が開けたところだ。そこから彼は樅の木のエルゼにかずかずの町や村を、河や小川を遙か遠くまで指差し教えたところだった。彼は遠くの鐘の音を聞いた。彼はある村の名を言つて額を手で拭い、真夜中だと言った。

彼はぞつとしてヒューヒューと吹きつける氷のように冷たい風の中に立ち、耳を澄ましながら手を耳に当てた。自分の名前が呼ばれるのを待つ人のように。彼は、長い間、そうして立っていた後、頭を小刻みに振り、崩折れた。

彼の頭は一個の小さな岩の上に安らいでいた。身体は長く伸ばされ、

手首の周りに血のように赤い線条痕のある両手を胸の上に十字に重ねた。フリーデマン・ロイテンバッツハー、痩せ地帯のヴァルローデ村の神の御言葉に仕える説教師は、いまはこう信じていた。自分は柩の中に横たわっており、自分の上には蓋があるのだと。しかし、彼は思い浮かぶままに、彼が自分について知り、考えることを、ぼんやりとであったが、とつおいつ思い巡らしていた。彼は眠りに落ちていった。そして夢の中でさらに先へと進み、縦の木のエルゼが歩いていった道をそちらへと渡っていった。

彼の傷は癒えていた。彼の鎖は抜け落ちていた。彼の牢獄の壁は破壊され、門が開け放たれた。父親が、邪悪な世界から救い出そうと、小さな可愛らしい子どもエルゼを腕に抱いて森へやってきたとき、縦の木のエルゼはフリーデマン・ロイテンバッツハー説教師に幸福を運んできたのだった。にもかかわらず世界の悲惨と苦悩は彼女を見つけて出し、彼女の心臓を破壊した。しかし、そのとき縦の木のエルゼは、フリーデマン・ロイテンバッツハーの幸福を彼女とともに持ち去りはしなかった。縦の木のエルゼは説教師の魂を自分とともに永遠の平安へ導き入れた。一六四八年のクリスマスこの夜、神が授けねばならないものの中で最善のものがこの二人に与えられた。

コンラート修士は彼の子を原野の真ん中、人間から遠く離れた場所に埋葬した。しかし、牧師の亡骸を村人達はクリスマス第二日、散々搜索した後、発見した。彼らは荒涼とした森から運び出し、村へ運びおろした。教会に隣接する土地へ埋葬した。

コンラート教師はその冬を小屋に過ごし、かわいそうなノロシカと小鳩の世話をした。しかし春になって、動物たちがもはや彼を必要としなくなり、オスナブリュックで和平が結ばれたことを誰もが知ると

ころとなったとき、彼は去っていった。貧しく、気の触れた、老ユステイーネは乞食泉の傍で彼に出会った。彼女は、彼の影が彼の前方の地面に落ち、黒い、まつすぐに立った影が彼の後をつけているのを見て言った。最後の生き残りが死んだと。

今日、痩せ地帯のヴァルローデ村からは、ただなお森の中のごく小さな廃墟が目に見えるだけである。三〇年間続いたドイツのこの戦争によって没落していったものが何であるのか、指折り数えて数え切れるものではなく、また、ことばで言い表せるものでもない。

註

* 註において対照させる聖書は『旧新約聖書』日本聖書協会・1955年である。

(1) Wallrode im Elendが原語であるが、ハルツ山中にはこの名の場所は存在しない。ブラウンシュバイク版全集のこの作品担当編註者は、恐らくハツセルフェルデ区裁判所区域内のアルローデという名により想起されたものではないかと説明する。訳者の地名辞典の調べでは、ハツセルフェルデはマグデブルクの近郊ハルツの麓の町Wernigerodeの南西に位置するとある。もとよりラーベの命名した架空の町名にほかならない。その詮索自体はともかくとして後続のElendに関して、編註者は本来、普通名詞のdas Elend(痩せ地)はハルツ山中で地名と共に用いられる事例がしばしばであると指摘する。そういう点からすると、むしろ固有名詞風に一組で扱うべきかも知れない。しかし、作中、ラーベは「痩せ地」という説明を行っている。この語は普通名詞として「(戦争の)悲惨・不幸」の意味をもつ。この一事から、二

重の響きを意図的にもたせてゆく傾向の強いラーベという作家の作風が逆に辿れるであろう。編註者が実在する名前に拘る理由はここにもあることを指摘する。

- (2) 三十年戦争時のスウエーデンの大將ブランドンブルク一族の出身。本名Adam Pfuelf。1659年死亡。800の村落の焼き討ちに関しては、ユニヴァーサル百科辞典27(ハレライプツヒ ツエードラー社 1744)に拠つたとみられる。
- (3) 本名Matthias G. (1584 1647) 三十年戦争時の皇帝軍の大將
- (4) 三十年戦争時代通常行われていた拷問。漏斗を使用して下肥を拷問を受ける相手に流し込んで飲ませる
- (5) スウエーデンの最高指揮官(1603 1651) 1641年以降、スウエーデン軍の最高司令官を務める
- (6) 訳者による追加註: Elise von der Tanne 通常訳であれば、「樅の木のエルゼ」で事足りる。ドイツ語の初学者が学ぶことであるが、von という語は姓の一部を成し、vonは貴族の所領の地名の前におかれ、かかる者即ち、貴族という身分証明の機能もあつた。ラーベは作中、例外を除いて、この形で作品の主人公の名前であるかのように扱つ。
- (7) 旧約聖書・エレミヤ記第25章30節と33節を踏む
- (8) 旧約聖書・エレミヤ記第3章4節から7節の引用。
- (9) 本名Johan Baner。三十年戦争のスウエーデンの最高指揮官(1598 1641) 1636年10月4日、ヴィットシュトゥック(オストプリーゲニッツ)で勝利した。数字についてはユニヴァーサル百科辞典3(ハレライプツヒ ツエードラー社 1733)に拠る。
- (10) イザヤ書第27章12節を踏む
- (11) 創世記第2章20節を踏む

(12) 原書21頁に「この学校の成立年及び変遷に関し、編註者が資料を掲げ、ラーベは資料なしにか、もしくは記憶だけを頼りにしたのではないかという推測を交えつつ、作品の叙述内容を資料と照合する作業を行っているが、その示唆に留めておく。

- (13) (14) (15)
作中においてラーベは広く知られるティリーによるマグデブルクの破壊に言及するが、「マグデブルク市史三巻」(1850)「F.W. ホフマン編纂」を参考資料としているもの、そこに記載されている死者や聖堂に逃れた難民の数には相違があることがこの作品編註者により指摘されている(訳者註: 数はラーベにおいて内輪に見積もられている)。ホフマンの著書が彼によって読まれていることはラーベの他作品資料研究において証明済みである。原書によるホフマンの記述との照合による註の詳細は転載を省略する。また同ホフマン書の中には、避難民として一命を留めたマグデブルク市住民たちによるエルベ河下流域の住民に広く死体の埋葬を依頼した嘆願書があつた事実が記載されている。
- (16) 原書編註者はラーベのマグデブルク資料の中にこの件に言及した資料を発見しないが、他の研究者フェーゼ(会報19号1979年 158頁)による調査を援用して、ラーベの参考資料を紹介、「祖国の歴史 二巻」(W.ゲルゲス 1844)
- (17) 註13記載のホフマンの歴史書中に、バニエール指揮官により破壊されたマグデブルク市におけるマンズフェルト伯の包囲事件が示唆されている。
- (18) 訳者による追加註: 原書はLuga。30年戦争は通例、1618年から1648年の期間とされているが、その遠因は遥か宗教改革の紛争後のアウグス

- ブルクの和議（1555）に端を発する相異なる目的のための、相異なる時期の相異なる交戦国間の闘争とも捉えられうる。ドイツにおいては国土が戦場となる国を全く疲弊させる事件であつたが、リーガに焦点を絞ると、ユーリヒ継承戦争を機に1569年7月10日、カトリックの軍事同盟としてカトリック連合「*Liga*」が形成された当然のことながらドイツのプロテスタント諸国軍事同盟としてプロテスタント同盟「*Union*」が存在し、それは既に1588年5月14日に結成されている。一方、国内に3宗派が宗教改革後、恒久的に分裂した状態である上に、宗教上の区分と政治的な国境線が連動しつつ、カトリックのハプスブルク家出身の神聖ローマ帝国皇帝と銘々の信奉する宗派を掲げる選帝侯並びに諸侯の支配の下で民衆は属する領主の信仰との軋轢の上に抗争による被害を直接的に体験せねばならない悲惨な生存を強いられる。まさに民の側から見た歴史、30年戦争がこのエルゼの歌の根幹をなす。ある意味でこの作品の隠れた主題である。
- (19) 原書の註は*Gene*は今日のルター訳聖書では*Gene*と綴られるが、十九世紀中葉までの旧版は*Gene*である旨記述される。創世記第32章25節、33節参照
- (20) 年代的に1588年の聖ヨハネの日が実際上の暦とは異なり、ラーベの捏造もしくは創造であることを編註者は指摘し、「ドイツの民間迷信」(ヴットケマイヤー編纂1926)では、聖ヨハネの日は「不吉の日」となっている説明。また草稿段階でラーベはこの日を「ヤコブの日」としているが、こちらも同書によると「不吉の日・不幸を運ぶ日」とされている旨、原書編註者は記す
- (21) ポルヘルトの著書『ハルツ山中の鳥』(1927)によると、小夜啼鳥はハルツ山では姿を見せない。しかし、ラーベは事実とは矛盾する極稀なことの一例をここに挙げている。破局の場面、エルゼの最期に牧師とともに立ち会うものたちの絵に登場する他の小道具(月光、ノロシカ)も共に、この鳥同様、ロマン主義において愛好されるなくてはならない小道具であるため諦められてはいない。
- (22) 註19のヴットケの書の中では、泥棒の死の歌を歌いながら己の影をうつかり踏む者は死ななければならない、とある
- (23) この詩は1583年10月24日に作られ、『詩集』に所収される
- (24) 註19記載のヴットケに拠る。魔女封じの手段として墓の土を振り撒く
- (25) *Melchior von Eggenstein* 皇帝軍最高司令官。1554年ガラスの後任として元帥となる。1564年、ハルバーシュタット並びにオスターピークを征服する
- (26) 民間信仰においては絞首刑にあつた者に関係するものすべては幸運を運び、魔を避ける意味をもつ
- (27) (28) (29) (30) (31) (32)
- 註29は聖餐式のパンとぶどう酒の意はコリント前書第11章25節、ルカ書第22章20節のイエスの最後の晚餐を示唆するものであり、註30はマタイ書第26章27節を踏み、この契約により贖罪がなされることを28節で告げていることをも踏む。更に註31はルカ書第二章14節を踏み、聖書の色合いが続く。そこへ註27・28・32が配置され、教会の周囲の人々の迷信行為が、画然と示される。
- (33) エレミア哀歌第3章6節参照
- (34) 子守唄(レクラム)中の『少年の魔法の角笛』ブーコ・フォン・ハルバーシュタット作
- (35) ハンス・クリストフ・フォン・ケーニヒスマルク(1600-1663)スウェーデンの大將は1629年北部ハルツ山麓で戦う。(クヴェドリンプ

ルク、ハルバーシュタット)

(36) ルカ伝第23章34節「父よ、彼らを赦し給へ。その為す所を知らざればなり」を踏む

(37) プラトンの『対話篇』ファイドン書は魂の不滅を扱っている。

(38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47)

この註が収まるロイテンバッハーの発言は、すべて聖書を基にした発言である。註38は歴史志略上第28章22節、民数紀略第14章34節及び列王紀略第8章57節の内容を踏む。註39は詩篇第94篇14節。註40はエズラ書第10章2節の「今なほ望みあり」を踏む。註41はヨブ記第15章25節「彼は手を伸べて神を敵し傲りて全能者に悖り」を踏む。註42は詩篇第37篇13。註43はイザヤ書第14章27節。註44はコリント書第13章3節。マタイ伝第5章13節及びヨブ記第6章63節。註45は詩篇第2篇4、詩篇第56篇8(日本聖書協会篇「旧新約聖書」における8に従う。原書註においては56篇9となっており、ルター版聖書(ドイツ語)では9となっている。註46はマタイ伝第16章18節。註47はマタイ伝第6章13節。但し、日本語版では「悪より救ひ出したまへ」で終わる。ドイツ語版では作品と関係する主の祈りの文言が後続する。Denn dein ist das Reich und die Kraft und die Herrlichkeit in Ewigkeit. Amen. 直訳のほつが作品との関連が明瞭と成るので、記述する。「王国と力と栄光は永遠にあなたのものでありますから」作中では dein(神)が unser(我々)となり、神のものでなくなっている。

* 訳出は以下の原書に拠る。

ELSE VON DER TÄNNE oder Das Glück Domini Friedemann
Leutenbachers, armen Dieners am Wort Gottes zu Wallrode im

Elend: Im WILHELM RAABE SÄMTLICHE WERKE:

Braunschweiger Ausgabe Band 9 Erster Teil,

VANDENHOECK & RUPPRECHT, Göttingen 1974

訳者あとがき

本作品はヴィルヘルム・ラーベ(1831-1910)の文学の特徴を濃縮して、提示したような作品である。それだけに論じようとするものに多くの材料を提供する。

さて、「あとがき」として、小さなまとまったものをついて、それだけに苦労する。もちろん、訳者がラーベの作品の翻訳を活字にして世に出すべきと考えたについては、繰り返し言つとおり、日本におけるラーベ受容の貧困である。これは一般読者に留まる現象ではない。この三月、つまり二〇〇一年三月、ドイツ本国からドイツ文学者が来日した。彼は、ラーベをトーマス・マンに比した。ところが、マン研究家はたちどころに迷惑そうな、不本意そうな表情を見せた。つまり、日本におけるラーベ受容の現状はそういうことなのである。もう少し、この間の凸凹を是正できないものかというのが本心である。

作品について、導入となるいくらかを「紹介するのが建前であるが、いま少し、軽い話題、即ち、翻訳作業中に気付いた問題点をきつかけに、話しておきたい」。

例えばこの翻訳書15頁に、「教会の前の墓地で、痩せ地帯のヴァルロー村の会衆が彼らの説教者を待っていた。」といつてく短い文がある。原書を見れば、「彼らの説教者」はGenitiv格で書かれている。まずwartenといつて動詞は古雅な用法といつて格を目的語にとる。しかし、それを知らなければ、まず蹟くのだが、いま問題として

いるのは、そんなことではない。なぜ、ラーベはわざわざこの徴の生えた古びた表現をとっているのかという点である。

原文を紹介しよう。

Auf dem Friedhof vor der Kirche wartete die Gemeinde von Wallrode im Elend ihres Predigers.

動詞 *warten* は通常 *auf* に導かれる、いわゆる前置詞付き目的語をとる動詞である。そこで簡単に *auf* の重複を避けたとする考えもある。だが、敢えて、この落し穴に大胆に足を踏み込んでみる。すると、たちまち「会衆」は墓地を待ち設けていたことになる。こつこつ危険を孕ませた文であることを一つ承知して、次に、*ihres Predigers* を通常の *Genitiv* の用法に従って直前の *Elend* にかけてみる。すると、「彼らの説教者の悲惨」となる。*Elend* という単語は「瘦せ地」の意味と同時に「悲惨」の意味もあり、そして厄介なことに、後者の意味のほうが一般的である。では、敢えてバカ正直にいまひとつの読み「ヴァルローデ村の会衆（教区民）」は説教者の悲惨状況のなかで教会の前で墓地を待っていた。「迷訳であるし、筋が通らなくなってくるので、すぐに引き返すのだが、先に訳したような問題のない訳にたどり着いた後で、全体的にもう一度、なぜ、ラーベは古めかしい表現を敢えてここで採用したのであるかという問いに向き合ってみると、ちよつとラーベの愉快な側面、お茶目な側面を我々は覗き見ることになる。同時に深刻な文脈の流れの中において考察すると、この説教者は実は個人的に内面の葛藤状況にあることが知れる。更に、その悲惨さは彼の教区民の蒙昧さによって惹き起こされたにせよ、同時にまた、時代が、歴史が、主人公と彼らの対立関係を丸呑みにしつつ、更に、上から否応なく覆いかぶさってくることの悲惨さの二重奏でもある。あまつさ

え戦場となつて踏みにじられた耕作地はただでさえ貧困な土壌なのである。彼ら教区民の生活の苦勞が推し量れるというものである。そして、ラーベは彼らが待ち受ける説教者に所有冠詞を用いて、「彼らの」、つまり、「よそ者のエルゼ父子の」、ではない自分達の説教者であることを明示する。いまや不審の目で眺めざるを得ぬ説教者ではあるけれども、神を見失い、潰神的になりつつも彼らの一縷の望み、即ち、貧しい彼らと共にある牧師、説教者であつて欲しいという一縷の願望が見え隠れする。そういう切なさ、いじらしさまでもが、この裂け目から漏れ聞こえそうな気がするのである。こつこつ読んでくると、我々がたびたびラーベ文学の「重層性」と呼んだものが、手に実感できる重さで迫ってくる。そしてこのなんでもない、読本授業ですりど上手に訳し抜け、あとを顧みることもない一文が、どうにもならないものとして、訳者の胸にのしかかる。言い換えれば、これが原語で作品が読める醍醐味、楽しみであるかも知れない。

翻訳という介在手段とは何もの一端をお話して、危うくここで終ろうとした。だが、それでは、困る。読んできた作品は集団リンチ事件ではないか。あのかの忌まわしい魔女伝説の系譜に与る作品ではないかという追撃の声が聞こえる。確かに、この作品は排斥の問題、十九世紀文学の主要テーマの一つ「個対集団」、「少数対群衆」が提起する問題を取り扱う作品であることを告げなければならない。さりながら同時に、縦の木のエルゼはあまりに美しい、詩的世界の夢として、ひと時の清涼剤として、我々の魂に働きかけ、潤してくれるものもある。そして同時に、通常ならば「美・善」として称賛されるはずのものを、憎む対象にしてしまつ、この群れとしての人の暴力性、獣性

を暴き、警告として現在も、尚、我々に反省を迫る。

更に、この作品が取り扱う時代背景が三十年戦争時ということも重大である。ことにラーベがこの作品を書くに当たったの契機を考えるとき、彼の歴史理解、即ち、ドイツ国及びドイツ国民を思念する彼の志の趣くところが、彼の現存在の問題とオーバーラップしていたことは見逃せない。ここに、ラーベ文学の軌跡を俯瞰するとき、なぜ、ラーベは作品を書かねばならず、また、同時に長きにわたって書き続けることができたかという問いに答を出す要素も含まれる。

そう指摘して、この稿を終える。